

力防遏ス

- 四 重要産業ノ飛躍的振興ヲ計リテ生産力ノ綜合的擴充ヲ爲シ日滿ノ外更ニ北支ヲモ加ヘテ全體的計畫ノ下ニ戰時ニ於ケル重要物資ノ自給自足ヲ圖リ且輸出貿易ヲ促進シテ帝國經濟力ヲ充實シ期ス
- 五 今次事變ニ於ケル銃後ノ處理及戰死傷病者竝ニ其ノ遺家族ニ對スル扶助ニ遺憾ナカラシムルト共ニ對支作戰完了後ニ於ケル復員ノ措置ヲ適切ニシ帝國ノ次期發展ノ萬全ヲ期ス
- 六 國體觀念ヲ宣揚シ日本文化ヲ振興シ大國民タルノ資質ヲ涵養スヘク文教ヲ刷新シ併セテ教育行政ノ改善ヲ行フ
- 七 非常時局ニ對スル國民ノ覺悟ヲ益々強調スルト共ニ國民生活ノ安定及國民心身ノ向上ニ必要ナル諸政策ヲ斷行ス就中農山漁村經濟振興ノ拔本的方策ヲ講ジ且中小商工業者及勞働勤勞者ノ厚生ニ力ヲ致ス
- 八 軍備充實、産業振興及國民生活安定ノ爲物價、金融、事業、實

易等ニ對シ國家的統制管理ヲ強化スルト共ニ非常時財政計畫ヲ確立シ稅制ノ合理的改革ヲ行フ

九 以上ノ諸政策遂行ヲ迅速的確ナラシムル爲政治行政ヲ刷新シ國家諸般ノ機構ヲシテ之ニ適應セシムルコトヲ期ス

極秘

(參考)

「國策大綱案」ニ關スル具體的事例

二 二付テ

一、對滿既定重要策ノ完成ヲ期シ特ニ大量移民ノ斷行ト投資ノ積極的援助ヲ敢行ス

二、主要作戰終了後ニ於ケル保障占領

主要作戰終了スルモ有力ナル兵力ヲ以テ北支、其他ノ要衝地、海港等ニ駐兵シ支那側軍隊ノ徹底的裁兵ヲ行フ

三、北支經營

戰局ノ如何ニ拘ラス北支政權ヲ指導シテ親日滿防共ノ特殊地帶タルト共ニ住民安居樂業ノ地タラシムルコトヲ圖リ積極的經濟開發ヲ行ヒテ日滿生產力擴充ニ寄與セシム

四、上海方面亦政權ヲ指導シ前項ニ準シテ施策スルモ特ニ英國勢力ノ驅逐ニ留意ス

五、南支、南洋等ニ對スル帝國將來ノ發展ノ爲所要ノ調査ヲ進メ必要ナル權益ノ設定ニ努ム

三 二付テ

- 一、國家總動員法ヲ制定シ之カ實行ヲ期ス
- 二、愈々國民精神動員ヲ徹底シ特ニ堅忍持久ノ精神ヲ以テ事變最終ノ目的ヲ達成スル如ク指導ス
- 三、軍需工業設備ノ增強ヲ圖ル
- 四、重要國防資源ノ自給ヲ圖ルト共ニ生産消費ノ統制、其他消費ノ節約、輸送及配給ノ適正、貿易ノ均衡、價格ノ規正等ニ關シ合理的指導統制ヲ加フ
- 五、戰費調達ノ爲萬全ノ策ヲ講ス
- 六、對支經濟戰ノ積極的方策ヲ講ス
- 七、軍占據區域ニ於ケル各種處理ヲ適切ナラシム
- 八、第三國ノ參戰ヲ防止スルト共ニ萬一之カ參加ノ場合ノ對應策ヲ講ス
- 九、軍備充實ト關聯シテ左記施設ノ遂行ヲ期ス

- (イ) 航空兵力擴大ノ爲航空機工業ノ擴大
- (ロ) 軍機械化促進ノ爲自動車工業ノ確立
- (ハ) 兵器製造原料自給ノ爲金屬工業ノ確立
- (ニ) 兵器製造能力増進ノ爲工作機械工業ノ確立
- (ホ) 化學工業ノ促進
- (ヘ) 國防諸施設ノ大陸進出
- (ト) 優秀船建造ノ促進
- (チ) 内地、朝鮮、滿洲、北支ヘノ輸送能力ノ増加
- (リ) 大陸及大洋ヲ繋ク大航空路ノ設定
- (ヌ) 防空施設ノ完備
- (ル) 各種交通機關ノ有機的調整

四 二付テ

一 生産力擴充資源及目標

生産力擴充ヲ爲スヘキ主要産業左ノ如シ

- (イ) 兵器工業
- (ロ) 航空機工業
- (ハ) 自動車工業
- (ニ) 工作機械工業
- (ホ) 製鋼業
- (ヘ) 液體燃料工業
- (ト) 石炭業
- (チ) 一般機械工業
- (リ) 輕金屬工業及其他非鐵金屬工業
- (ヌ) 造船業
- (フ) 電氣事業
- (ク) 鐵道車輛工業
- (ケ) 重要化學工業
- (カ) 製藥業

(三) 産 金 事 業

(イ) パルプ及人造纖維工業

前記重要資源ニ付昭和十七年ヲ目標トシ生産擴充目標ヲ定ム

二 本計畫施行ノ地域及生産分野

(イ) 重要産業ノ振興ハ日滿一體トシ適地適應主義ニ依ルハ勿論ナルモ國防上ノ必要ヲ顧慮シ所要産業ノ大陸進出ニ努ム

(ロ) 北支資源ヲ遺憾ナク利用シ以テ日滿生産力擴充ニ寄與セシム

(ハ) 日滿北支ニ於ケル重要産業振興ノ相互關係ヲ合理的ナラシムル爲速ニ日滿北支ヲ通スル全體的な重要産業計畫ヲ立案シ之ニ基キ指導統制ヲ行フ

三 産業擴充計畫遂行ノ爲左記手段ヲ併用スル

(イ) 國際收支ノ關係ヲ考慮シ純經濟的産業ノ振興ニ注意シ且貿易及海外投資ノ統制及爲替管理ヲ強化ス

(ロ) 物資需給ノ調節ヲ圖リ消費ノ指導統制ヲ爲ス

イ) 金融統制ヲ行ヒ産業資金ノ供給融通ヲ指導援助シ計畫ノ順調ナル遂行ヲ促進ス

(ニ) 物價ヲ調節シテ經濟混亂ヲ豫防シ國民消費ノ節約ヲ勵行ス

(ホ) 同種産業ノ結合ヲ圖リ且之ニ對スル國家統制力ノ強化ヲ圖ル

四 本計畫ノ遂行ニ當リテハ漸進合理的ニ經濟機構ノ改革ヲ行ヒ以テ官民勞資心ヲ一ニシ愛國ノ至誠ヲ以テ大業ノ完成ヲ期ス

五 産業擴充計畫ハ軍備充實計畫ト能ク關聯ヲ保チ圓滑ナル進捗ヲ圖ル

六 各種各般ノ研究機關ヲ整理統合シ綜合的並ニ有機的ニ科學ノ利用促進ニ努ム

五ニ付テ

二一

出征將士ノ家族及戰死傷病者並其遺家族ニ對スル扶助ヲ徹底ス
復員處理

(イ) 戰後ニ於ケル國民精神ノ弛緩ヲ戒メ愈々東亞ノ盟主タル帝國
ノ立場ヲ國民ニ諒得セシメ益々國民精神ノ昂揚ヲ圖ル

(ロ) 復員出征軍人(傷病者ヲ含ム)ノ就職、生活、安定ニ力ヲ致
シ且戰病死者遺族ノ扶助ニ留意シ社會問題ノ發生ヲ未然ニ防遏
ス

(ハ) 復員ニ伴フ産業、勞働ノ急激ナル變調及一時的勞力供給過剩
ヲ未然ニ防止スルノ施策ヲ講ス殊ニ事變ノ爲膨脹シタル産業ハ
努メテ爾後ノ軍備充實並ニ貿易伸張等ニ利用シテ之カ操業短縮
又ハ停止ヲ避ク

(ニ) 事變ノ爲一時停止又ハ操短セル一般産業又ハ公共的事業ヲ速ニ
ニ復活ス

(ホ) 平戰時産業ノ相互轉換ニ付研究スルコト

六ニ付テ

一 教育行政ノ改善

- (イ) 教育ノ監督制度ヲ改善強化ス
- (ロ) 教育行政官及教職員ノ資質ノ向上ト小學校教職員ノ優遇ヲ講ス
- (ハ) 教育ノ都市偏重ト其ノ營業化ヲ斷減ス

二 學校教育ノ改善

(イ) 學制

- (一) 教育ノ實際化ト師範教育ヲ改善シ教育ノ機會均等ヲ徹底ス
- (二) 青年學校ノ義務化ヲ斷行ス

(ロ) 教育内容

- (一) 智的偏重ヲ排シ大ニ德育ヲ振興シ體育ニ力ヲ致ス
- (二) 實務的教育ヲ一層重視ス特ニ産業技術者ノ養成ヲ促進ス
- (三) 女子教育ヲ良妻賢母主義ニ徹底セシム

三 社會教育ノ振興ヲ期ス

七 二付テ

社會保險制度ノ擴充

社會風教ノ改善施策

勞務者對策ノ強化

勞務者修養教育慰安施設ノ普及

勞務者保護ノ徹底

勞働力配給ノ爲國家統制機關ノ擴充

四 農山漁村對策ノ強化

土地及小作制度ノ改善

農山漁村負擔ノ輕減

肥料、米穀及蠶繭對策ノ確立

農村工業ノ發達促進

農山漁村教育指導ノ改善ト農民生活ノ健實ヲ期ス

産業組合ノ飛躍的發展促進

五、中小商工業者ノ合理的保護

六、人事行政機關ノ創設ト文官任用令ノ改正斷行ト官吏再教育ノ實現

七、庶民金融ノ調整特ニ負債整理ノ徹底

八、醫療衛生施設ノ普及改善

八ニ付テ

一、公益供給業並ニ運輸交通業ニ對スル監督統制ノ強化ヲ期シ特ニ電力國家管理ヲ實現ス

二、私企業中特ニ基礎産業ニ對スル監督統制ヲ強化シ金融中樞機關ニ對スル國家管理ヲ斷行ス

三、貿易ノ國家統制ヲ斷行ス

四、取引所制度ヲ改善ス

五、稅制改革ノ斷行

國民負擔ノ均衡ヲ具現シ不勞所得ニ重課シテ國民ノ勤勞的精神ヲ

向上シ併セテ國家財政ノ基礎ヲ確立ス

六 非常時財政計畫ノ樹立

今次事變ニ引續キ昭和十七年ニ至ル非常時財政計畫ヲ樹立シ時局收、滿洲及北支經濟開發ノ産業擴充計畫及軍備充實計畫ノ遂行ヲ準備ス

右計畫ニ當リ考慮スヘキ事項次ノ如シ

- (イ) 積極的財政方針ヲ持スルモ放漫ヲ戒メ堅實ヲ旨トス
- (ロ) 日滿北支ヲ以テ金圓プロツクヲ完成ス
- (ハ) 産業開發ノ爲極力資金ヲ融通シ以テ産業擴充ニ依リ歲入ノ増加ヲ圖リ且貿易ノ振興ニ依リ輸入超過ヲ防止ス
- (ニ) 産金ヲ獎勵シ日滿ニ於ケル産金五億圓ヲ目標トス
- (ホ) 非常時國策遂行ノ爲必要ナル經費ハ主トシテ公債ニ依ルコトトシ特ニ公債消化ノ爲萬般ノ措置ヲ講ス
- (ヘ) 日本銀行及其他特殊銀行ノ制度ヲ改正シ且其ノ運用ヲ適切ニ

シ非常時金融動員ニ遺憾ナカラシム

供覽

企畫院發第二〇號

昭和十三年一月十五日

企畫院次長



内閣書記官長

殿

昨十四日當院ニテ各省次官ノ御協議願ヒ決定致候別紙「國策大綱案」
一部及送付候

追テ本案ハ來週火曜日（一月十八日）ノ閣議ニ上程ノ運ニ致度候間
御了承相成度候

閣乙八

内閣





國策大綱案

國體ノ本義ニ基キ舉國一致内ニ國力ノ充實ヲ圖リ外ニ帝國ノ發展ヲ遂クルヲ以テ施政ノ根本方針トシ向後數年ニ亘ル非常時ヲ目標トシ左記諸政策ヲ斷行ス

- 一 帝國ノ對外國策ハ日滿支ノ鞏固ナル提携ヲ具現シ東洋永遠ノ平和ヲ確立シ世界ノ平和ニ貢獻スルヲ以テ基本トス
- 二 日滿兩國不可分關係ヲ堅持シテ對滿重要策ノ完成ヲ期シ對支策ノ具現ニ積極的努力ヲ爲シ南方ニ對スル經濟發展ニ努ム
- 三 支那事變ニ對スル軍事目的達成ニ遺憾ナカラシメ且國防ノ必要ニ應スル爲國家總動員態勢ヲ完成スルト共ニ今後一層軍備ノ充實ヲ圖ル尙支那長期抵抗ニ對應スル一切ノ措置ヲ執ル
- 四 向後四年ヲ目標トシ重要産業ノ振興ヲ計リテ生産力ノ綜合的擴充ヲ爲シ日滿ノ外更ニ北支等ヲモ加ヘテ全體的計畫ノ下ニ國防上

重要物資ノ供給ヲ確保シ且輸出貿易ヲ促進シテ國際收支ヲ改善シ以テ帝國經濟力ノ充實ヲ期ス

五 今次事變ニ於ケル銃後ノ處理及戰死傷病者竝ニ其ノ遺族家族ニ對スル扶助援護ニ遺憾ナカラシメ且復員ノ措置ヲ適切ニシ更ニ在支居留民ノ復興ニ必要ナル措置ヲ講シ以テ將來ニ於ケル帝國發展ノ萬全ヲ期ス

六 敬神ノ國風ヲ振起シ國民思想ノ指導ヲ強化徹底シ日本文化ノ振興ヲ圖リ大國民タルノ資質ヲ涵養スヘク文敎ノ刷新ヲ期ス

七 非常時局ニ對スル國民ノ覺悟ヲ益々強調シ國民生活ノ安定及國民體力ノ向上ニ必要ナル諸政策ヲ實現ス就中農山漁村ノ振興竝ニ

公表ニ當リテハ二ノ「南方ニ對スル」以下ヲ左ノ如ク改ム
南方諸國トノ經濟提携ニ努ムルト共ニ第三國トノ友好關係増進ニ留意ス

九 共產主義其ノ他國體ト相容レサル思想行動ニ對シ之カ艾除克服ヲ期ス

十 以上ノ諸政策遂行ヲ迅速的確ナラシムル爲政治行政ヲ刷新シ國家諸般ノ機構ヲシテ之ニ適應セシムルコトヲ期ス

閣議



閣田第二六三號

案起

昭和十三年十月二十二日

閣議決定 昭和十三年十月二十五日施行
裁可 昭和 年 月 日 行

昭和 年 月 日

內閣總理大臣 **友**

內閣書記官長



內閣書記官



外務大臣

友

陸軍大臣

友

文部大臣

友

遞信大臣

友

厚生大臣

友

內務大臣

友

海軍大臣

友

農林大臣

友

鐵道大臣

友

大藏大臣



司法大臣

友

商工大臣



拓務大臣

友

別紙企畫院總裁上申
九州東海岸石炭輸送設備計畫

二

要綱ニ關スル件
右閣議ニ供ス

通牒案

昭和十三年十月二十五日

内閣書記官長

内務大臣

大藏大臣

陸軍大臣

〔宛各通〕

海軍大臣

商工大臣

逓信大臣

鐵道大臣

九州東海岸石炭輸送設備計畫要綱
別紙ノ通閣議決定相成候條依命此段
及通牒候

(二)

昭和十三年十月二十五日

内閣書記官長
企畫院總裁宛

依命通牒

昭和十三年十月三日企畫院上申第七二號上
申九州東海岸石炭輸送設備計畫要
綱上申、通閣議決定相成候



企畫院上申第七二號

昭和十三年十月二十一日

企畫院總裁 瀧

正

雄



內閣總理大臣 公爵 近 衛 文 麿 殿

九州東海岸石炭輸送設備計畫要綱ニ關スル件

九州東海岸石炭輸送設備計畫要綱ニ關シ別紙ノ通閣議決定相成様致度
理由ヲ具シ此段及上申候

閣甲ニ六三

內閣



九州東海岸石炭輸送設備計畫要綱

我國軍需產業運營ノ根幹ヲ爲ス八幡製鐵所ヲ始メ沿岸諸工場ニ依ル洞海湾ノ利用ヲシテ最モ合理的且能率的ナラシムルト共ニ關門海峡ノ交通ヲ適當ニ整理シテ其ノ安全敏捷ヲ確保シ併テ北九州重工業地帯ノ過度ノ密集竝ニ石炭ノ陸上輸送路ノ一方的ナルヲ防止シテ適宜之カ分散ヲ計策スルハ現下ノ國情ニ鑑ミ産業上國防上喫緊ノ要務タリ。加之生産力擴充四箇年計畫竝ニ石炭需給五箇年計畫ノ速行ニ伴フ内外地石炭ノ増産計畫ノ結果飛躍的ニ増産セラルル所ノ我國重工業發展ノ基礎資源タルヘキ筑豊炭ノ輸送竝ニ其ノ配給ヲ圓滑セラシムルノ施設ヲ講スルコトハ是又現下ノ情勢ニ徴シ極メテ緊要ノコトニ屬ス。依テ苅田ニ相當設備ヲ有スル一港ヲ新設スルト共ニ之ニ對應スル鐵道及通信ノ設備ヲ完備シ以テ叙上各種ノ要望ヲ充足セシメムトス。其ノ要綱左ノ如シ

一 港灣設備

- (イ) 荷役能力九百萬噸中石炭八百萬噸雜貨一百萬噸トス
- (ロ) 本港第一期工事ハ蒸當リ小型船ニ依ル石炭年三百萬噸雜貨年二十萬噸ニ對スル施設ヲ昭和十四年度乃至同十六年度迄ニ完成ス

爾餘ノ工事ハ情勢ノ推移ヲ見テ可及的速カニ完成ス

- (ハ) 本港ハ將來石炭積出港ト併セテ工業港トシテノ利用ヲモ考慮シテ計畫ス

二 鐵道輸送設備

上記一ノ港灣設備ニ對應シ新刈田港驛ノ設置竝ニ必要ナル諸般ノ輸送設備ヲ整備擴充ス

三 以上ノ荷役能力竝ニ工業ノ發展ニ適應シテ通信設備ヲ整備シ以テ商取引上ノ圓滑ヲ圖ル

四 本計畫ノ實施ニ關シテハ財政上ノ都合等ヲ考慮シ別途ニ之ヲ決定スルモノトス

理由

別紙要綱所載ノ通九州東海岸ノ苅田ニ新港ヲ建設スルト共ニ之ニ對
應スル鐵道及通信設備ヲ整備スルハ産業上國防上緊急ノ必要アリト
認めラルルニ由ル

内閣

極
秘

附
屬
文
書

一	港灣計畫概要	1頁
二	鐵道輸送設備計畫概要	2頁
三	刈田港設置ニ對スル陸軍側ノ要望	6頁
四	海軍側ノ要望	7頁
五	港灣ノ荷役能力決定ノ根據	9頁

一、港灣計畫概要

全計畫

第一期計畫

一、荷役能力

石炭 八〇〇萬噸
雜貨 一〇〇〇

三〇〇萬噸

二〇〇

一、施設

航路、泊地(面積)一、四四〇、〇〇〇平方米

(水深)三米

七八〇、〇〇〇平方米

(水深)三、四、五米

埋立(面積)一、〇一五、〇〇〇

四七六、〇〇〇

岸壁及物揚場(延長)

水深八米 八〇〇米

四・五米 一、一〇〇

三米 八〇〇

六〇〇米

五五〇

一、修築費 一五、六〇〇、〇〇〇圓

七、二〇〇、〇〇〇圓

二、鐵道輸送設備計畫概要

別記要綱ノ方針ニ基キ鐵道輸送設備ノ計畫ヲ樹ツルニ石炭輸送ニ關シテハ一個ノ石炭列車ノ輸送量ヲ一應七一〇噸ト想定シ第二期ニ於テハ一日四二ヶ列車ヲ要ス。

從ツテ、刈田港一行橋間ニ貨物複線ヲ敷設シ且行橋一伊田間ヲ複線トスル必要アリ。又將來ノ筑豊炭増産計畫ノ中心ヲナスモノハ新飯塚以南ノ諸炭坑ナルヲ以テ之等各炭坑ノ石炭ヲ刈田港ニ輸送スル爲ニハ直方ヲ經由セスシテ鯉田一金田間ニ新線ヲ敷設シテ之ガ輸送ノ圓滑ヲ期スル必要アリ。

刈田港鐵道施設ハ國道ノ東側ニ貨物驛ヲ設ケ着發本線ハ雜貨車（日豐本線ノ貨物列車ノ大部分ヲモ此處ニ着發セシム）ト石炭車トニ分チ其ノ中間ニ仕分線ヲ設ケ。石炭車ハ到着線ヨリ直ニ石炭留置線ニ散轉シ之ヲ適時引出シテ石炭埠頭ノ高架棧橋上ニ引上グ。

船積ニ對シテハ埠頭北側沿ヒニ設ケタル高架棧橋上ヨリ漏斗ニヨリ直ニ船積ヲナス。又高架棧橋ノ南側ニ貯炭場ヲ設ケ「トランスポートター」ニヨリ積出シ得ル設備ヲモ併用ス。

(六〇〇萬噸)

汽船積ニ對シテハ埠頭ノ南側ヲ充當シ別ニ高架棧橋ヲ建造シ「ベルトコンベヤー」式ローダー」ニ基ヲ設ケ船積ヲナス。

(二〇〇萬噸)

空車ハ高架棧橋ヨリ下リ直ニ出發線ニ入ルモノトス。機關區及檢車區等ヲ設ケ行橋ノ關係機關ト併用ス。

雜貨ニ對シテハ埠頭扱一〇〇萬噸ヲ取扱フコトトシ貨物驛ヨリ雜貨埠頭ニ引込線ヲ敷設ス。

(イ) 第一期工事

荻田港ニ於テ石炭浮積三〇〇萬噸、雜貨二〇萬噸ヲ取扱フコトトシ、之ニ對シ著發本線、仕分線、石炭留置線、高架棧橋、貯炭場

ニ付計上セザルヨトトシテ工事費總計八、三六〇、〇〇〇圓トナルベシ。

(ハ) 工事豫算

名稱	第一期	第二期	計
(一) 刈田港	三、七三〇、〇〇〇圓	三、四六〇、〇〇〇圓	七、一九〇、〇〇〇圓
(二) 刈田一橋間	七〇〇、〇〇〇	一	七〇〇、〇〇〇
(三) 行橋	一五〇、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇	七五〇、〇〇〇
(四) 行橋一伊田間	三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	三、六〇〇、〇〇〇
(五) 伊田	一五〇、〇〇〇	一	一五〇、〇〇〇
(六) 金田一喰田間	一	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
(七) 新飯塚操車場	一	未詳	未詳
計	五、〇三〇、〇〇〇	八、三六〇、〇〇〇	一三、三九〇、〇〇〇

機械設備、貨物取扱線、機関車、諸建物等ヲ荊田港ニ設備スルモノトス。

然シテ、之ガ配線ハ第二期工事ノ一部ヲ敷設スルモノトス。其ノ工事費ハ後記ノ通り三、七三〇、〇〇〇圓ニシテ外ニ伊田一行橋間各驛改良並ニ行橋一荊田間貨物線新設等ノ工事ヲ要シ總計五、〇三〇、〇〇〇圓トナルベシ。

(ロ) 第二期工事

石炭貯積六〇〇萬噸、汽船積二〇〇萬噸、雜資（主トシテ岸壁荷役）一〇〇萬噸ヲ取扱フマトトシ之ニ對シ第一期工事ノ施設ヲ擴充ス。

第二期ニ於テハ荊田港ノ追加工事約三、四六〇、〇〇〇圓ヲ要シ外ニ(イ)行橋驛改良、(ロ)伊田一行橋間線路増設、(ハ)金田一荊田間新線敷設、(ニ)新飯塚附近操車場新設等ノ工事ヲ施行スル必要アリ。コノ内(ニ)ニ關シテハ直方操車場ト關聯シ考慮スルヲ要シ調査未了

三、刈田港ノ設置ニ關スル陸軍側ノ要望
陸密第一三〇五號

昭和十三年九月二十六日

陸軍次官 東條英機

企畫院次長 青木一男 殿

九州東海岸石炭輸送計畫ニ關スル件通牒

石炭需給計畫ニ伴ヒ首題ノ件ニ付豫テ貴院ニ於テ審究中ノ趣當方ニ於テモ軍事上ノ見地ニ基キ之カ實現ヲ要望スル所ニ御座候條格別ノ御配慮相成度申進候

但シ築港ノ位置及施設、背後鐵道施設ノ檢討及全工事著手順序等ニ關シテハ主務者ヲシテ別途協議致サシムヘク申添候

四、 刈田港設置ニ對スル海軍側ノ要望

官房機密第四一八四號

昭和十三年八月三日

海軍次官 山本 五十六

企畫院次長 青木 一男 殿

九州東海岸石炭輸送設備計畫ニ關スル件照會

石炭需給五箇年計畫ニ伴フ北九州炭ノ増産計畫ニ關聯シ首顯ニ關シ豫テ貴院ニ於テ案畫中ノ趣ノ處昭和十六年以降ニ於テハ北九州炭ヲ若松港ノミヨリ積出不可能ナル爲別ニ積出港ノ新設ヲ必要トスルコト明瞭ニ有之又戰時ヲ豫想スル場合出入航路狹隘ナル若松港ニ北九州炭全部ノ積出ヲ依據スルハ防空上不測ノ障害ヲ惹起スルノ虞アル

ノミナラズ關門海峡ハ海軍艦艇並ニ海陸軍徵備船舶通航ノ圓滑ヲ期
シ且敵潜水艦ノ内海侵入防止ノ爲一般船舶ノ通航ハ相當程度制限若
ハ禁止ノ已ム無キヲ豫想致サレ候ニ付テハ九州東海岸ニ石炭積出港
新設ニ當リテハ右ノ事情併セ考慮ノ上計畫ヲ進ムルコトニ御取計相
成度

(終)

	千噸	
總出炭量	27,596	100%
山元消費	2,760	10%
總送炭量	24,836	90% (100%)
港送り	16,942	61% (68%)
八幡送り	4,030	15% (16%)
其他送り	3,864	14% (16%)

昭和十六年ニ於ケル筑豊炭ノ全送出量ハ大凡次ノ如ク豫想セラレ。

五、港灣ノ荷役能力決定ノ根據

田川線(宮床線ヲ含ム)

行橋一伊田間 1,242千噸

後藤寺以遠 2,980

伊田線(全區間) 1,490

赤坂線 1,739

土山田線 4,226

館田以遠 2,980

小竹一勝野間 4,467

直方一中間 2,980

折尾(含遠智川) 1,242

宗木線(全區間) 745

小倉鐵道

筒井鑛業 線 745

産業セメント

而シテ右全送炭量二四、八三六千噸ノ各線區別送炭量ハ概ネ左ノ如ク推定セララル。即チ

以上、中刈田港、新設ニヨリ現行鐵道施設並ニ運賃、下ニ於テ石炭
 輸送七刈田港、港勢國內ト目セラルベキ地帯ハ田川線、宮床線沿線
 、田川郡地方、炭礦及將來日田線開通後、實末山炭礦ニシテ昭和十
 六年度ニ於ケル石炭地帯、坑所送炭豫想量ハ

全送炭量

四、四四二千通

田川線

四、二二二千通

内 譯

實末山

二二〇、

ナルモ其ノ全量ヲ刈田港積出ト見ルコトハ事實ニシテ從來ノ
 實績ニ徴スレバ、七記田川線、宮床線及石炭ノ中若松、巨畑兩驛
 着ハ昭和十一年度、實績ニ於テ

總發送 巨畑着 若松着 甲者計 總數ニ對スル
 比

田川線 1,823,556

299,536

808,062

1,105,598

61%

官採炭	787,842	242,899	340,463	583,362	75%
計	2,591,398	542,435	1,146,525	1,688,960	65%
伊田炭	990,823	259,030	424,990	684,020	69%
上三田炭	2,582,026	759,612	1,053,781	1,813,393	70%

ニシテ概ネ六五%ニ該當ス、而シテ昭和十六年ニ於ケル港灣積出量ハ概ラク相當上昇スルモノト思ハルヲ以テ假ニ其ノ比率ヲ七五%トスレバ上記各線ヲ經由シテ刈田港ニ送炭サルルモノハ約三、三三二十通トナルベシ。

次ニ伊田線出炭ノモノニツキ考慮スルニ其ノ適當運道運賃ニ於テハ
 方城驛發 赤池炭坑驛發

若公着	三三七	斤	九七錢
若公着	三三七	斤	九一錢
戸畑着	三八八	斤	九七錢
戸畑着	三八八	斤	九七錢
刈田着	四〇〇	斤	一〇四錢
刈田着	四〇〇	斤	一〇四錢

昭和十三年八月運賃相場
(保険料ヲ含マズ)

積出港	市場	汽船運賃	積出港	市場	帆船運賃	石炭海上運賃	斯クテ
若松	京濱	5,300圓	若松	阪神及尼ヶ崎	3,10圓	上	若松着ニ比シ
小樽	"	6,40"	"	和歌山	3,67"	運賃	ヲ検討スルニ左ノ如クニシテ
室蘭	"	5,40"	"	節磨網干島	2,74"	ヲ	七錢乃至十三錢ノ運賃高トナルガ纏ヘツテ現行
留萌	"	6,50"	"	徳岡山	3,21"	検討	
釧路	"	6,10"	"	廣島川入	2,74"	スル	
若松	伊勢灣	4,90"	"	三田尻島	1,79"	ニ	
小樽	"	7,00"	"	宇和島	2,58"	左	
室蘭	"	6,00"	"	高松坂出	2,58"	ノ	
			"	佐賀關	2,00"	如	
			"	津久見	1,90"	ク	
室蘭	鹽釜	3,90"	宇部	阪神及尼ヶ崎	2,65"	ニ	
小樽	新潟	4,80"	"	和歌山	3,22"	シ	
"	伏木	5,00"	"	節磨網干島	2,29"	テ	
若松	敦賀	4,60"	"	徳岡山	2,76"		
小樽	"	6,20"	"	廣島川入	2,29"		
			"	三田尻島	1,88"		
宇部	京濱	5,20"	"	宇和島	1,34"		
"	伊勢灣	4,90"	"	高松坂出	2,13"		
			"	佐賀關	2,13"		
			"	津久見	1,55"		
			"		1,45"		

若松對宇部ノ汽船關係トシテハ特段ノ差違ナキモ帆船ニ付テハ何レモ噸當リ四十五錢方ノ相違アルヲ以テ新港刈田對若松ヲ比較考量スルニ當リテハ其ノ距離ハ僅カニ十四、五哩ニ過ギザルモ洞海湾ニ於ケル石炭荷役作業ノ輻礫ニヨル船待チ或ハ關門海峡通過等ノ諸事情ニヨリ相當ノ運賃低減（大凡三十錢位）ヲ豫測スルコト可能ナリ。從ツテ絨七ノ方域、赤池炭坑ニ於ケル七錢乃至十三錢ノ運賃高程度ノモノノ刈田港ヘノ流入ヲ見込ム場合ニ於テハ其ノ港灣送炭豫想ハ百九萬六千噸ナリ。即チ

十六年坑所送炭量一、四六一千噸

港灣送炭ヲ七五％トシテ

一、〇九六千噸

以上ノ如ク田川線方面ヨリ刈田港送リトナルベキ數量ハ最大四、四二七千噸トナリ本計畫ノ想定ニ對シ猶三、五七三千噸余約四五％ノ不足トナルガ右ハ昭和十六年以降ニ於ケル筑豊炭出炭量ノ増送ヲ全然見込マザル數字ニシテ其ノ他昭和十六年以降ニ於ケル寶珠山炭坑ノ飛

噸的増産更ニ從來ヨリ企圖セラルル洞海湾改修計畫ニ伴フ戸畑港側
浮標ノ撤去計畫ニヨレバ今後ノ戸畑港ノ汽船積出能力ハ現在最大五
百萬噸ト想定セラルルモノガ相當多量ノ積出能力ヲ減殺セラルルニ
至ラントスルノ實情ニ在ルヲ以テ當然右ニ依ル減退輸送量ハ將來之
ヲ新刈田港ニ轉嫁セシメザルヲ得ズ。而シテ其際必然的ニ問題トナ
ルベキ運賃關係ニ付テハ本築港計畫ニ關聯シテ敷設セラルベキ金田
餘田間新線ノ連絡ニヨリ筑豐奥地炭田ノ出炭ヲ誘因スル場合ニ於テ
刈田着ハ若松着ニ比シ噸當リ赤坂ニ於テ三一錢、上山田ニ於テ二七
錢ノ高額トナルモ此等ノ運賃問題ニ關シテハ既述ノ新港ヲ經由スル
場合ニ於ケル大凡三十錢程度ノ海上運賃廉ヲ期待シ得ルヲ以テ右海
陸運賃ヲ比較考量ノ上要スレバ將來新港完成ノ曉ニ於テ兩者ニ付綜
合的ニ適正ナル調整ヲ行ヒ以テ新港建設ノ使命ヲ全フセントス。
斯クシテ絛上ノ諸々ノ事情ヲ考慮スルニ於テハ刈田港ノ總取扱量ハ
昭和十六年度ニ於テ既ニ七百萬噸ヲ超過スルヲ以テ本計畫要綱ニ於

テ詳述セル如ク軍事上、國防上更ニ交通上ノ觀點ヨリ刈田港ノ石炭
積出能力ヲ八百萬瓩ト想定シタルナリ。

次ニ雜貨百萬瓩ノ吞吐能力ニ付テハ將來本港ヲシテ其新設ノ目的ニ
ヨリ工業港トシテ發展セシムルノ趣旨ト更ニ又最近ニ於ケル洞海灣
ノ雜貨ノ年間吞吐ノ大約百萬瓩内外ナルノ實情ヨリ一應敍上ノ能力
ヲ掲ゲタルモノニシテ當面ノ問題トシテハ新港ノ勢力範圍ニ屬スベ
キ諸炭坑ノ杭木約十五萬瓩其他新港ノ設置ニヨリ沿線附近出入ノ雜
貨並ニ將來ノ工業地帶發展ニ伴フ諸物資ノ吞吐ヲ豫想想定セルモノ
ナリ。

極秘

全書院上申第七二號

參考圖面

近平面看

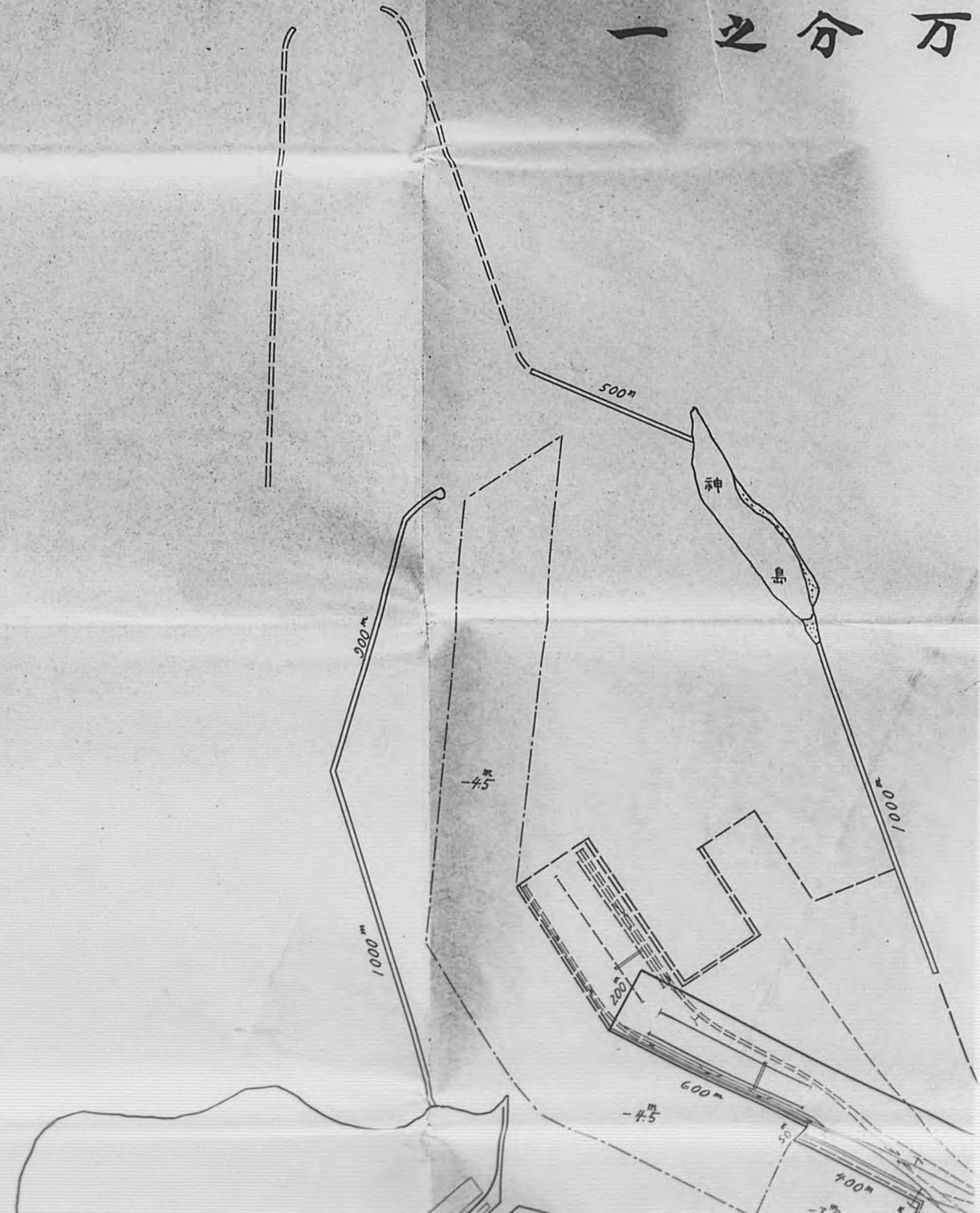
一之分万

關下
部今司委
★ 13.6.8 ★
濟查檢

羽
島

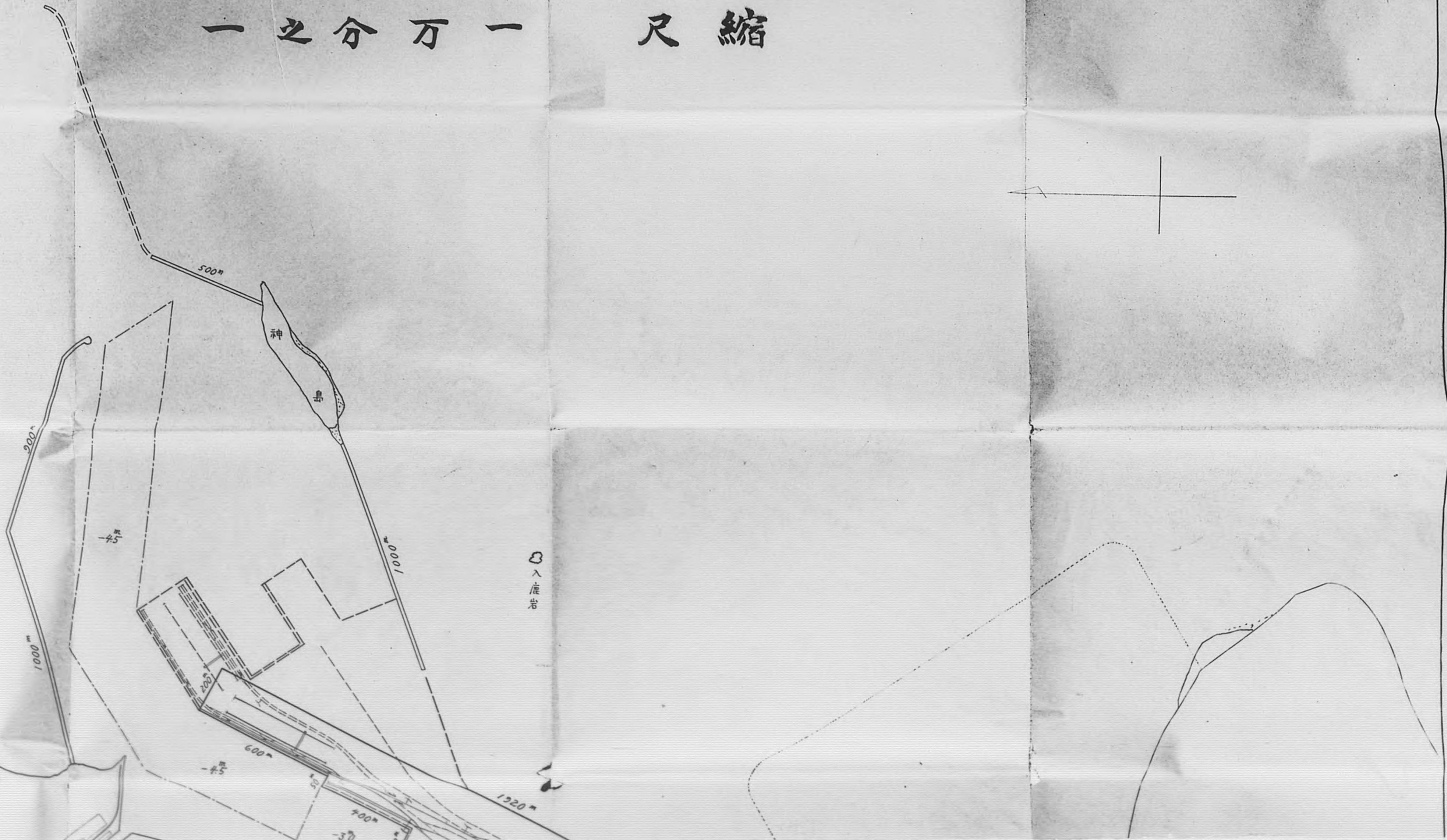


毛
無
島

菊田港及附近平面

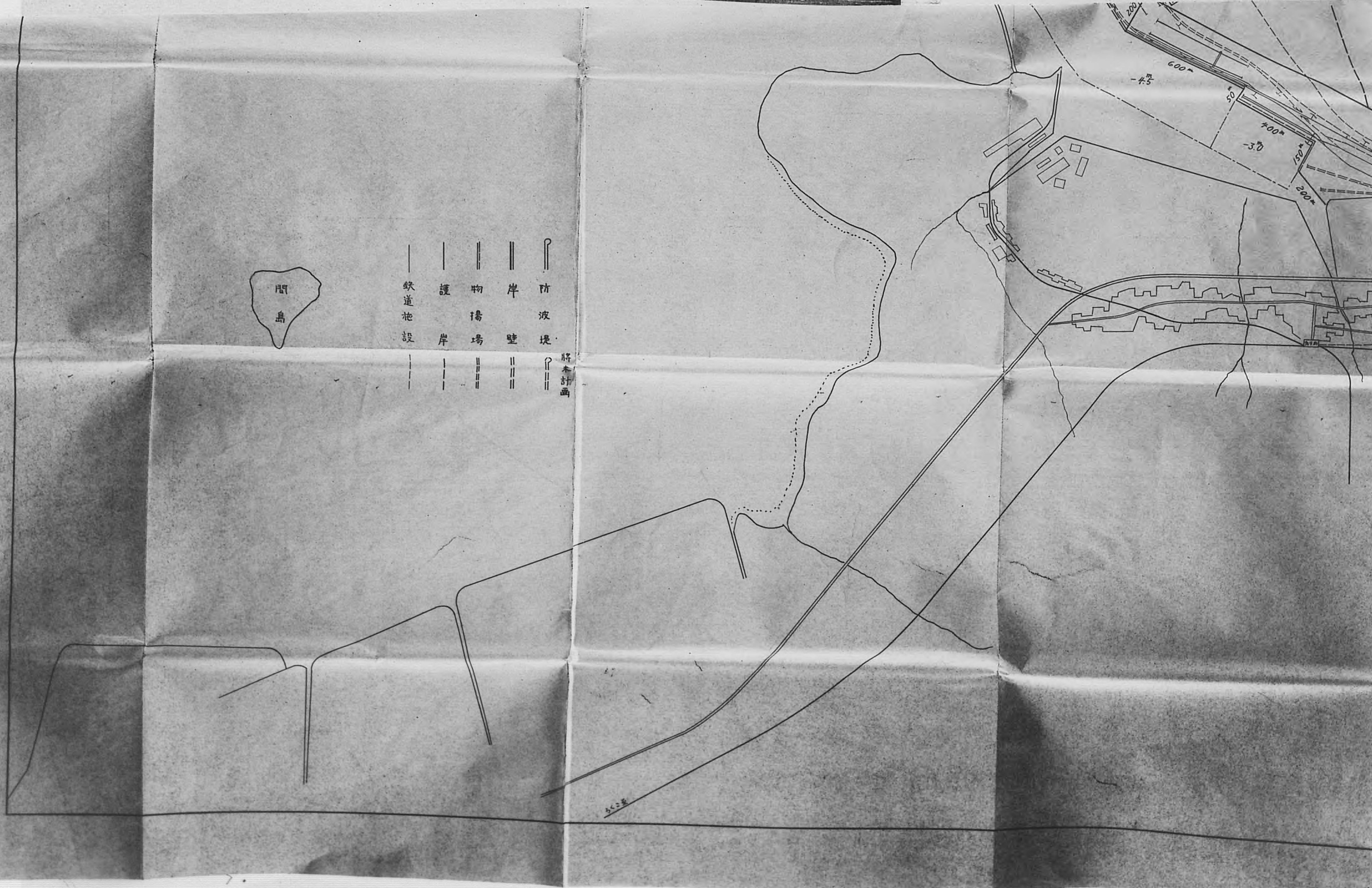
縮尺 一萬分之二

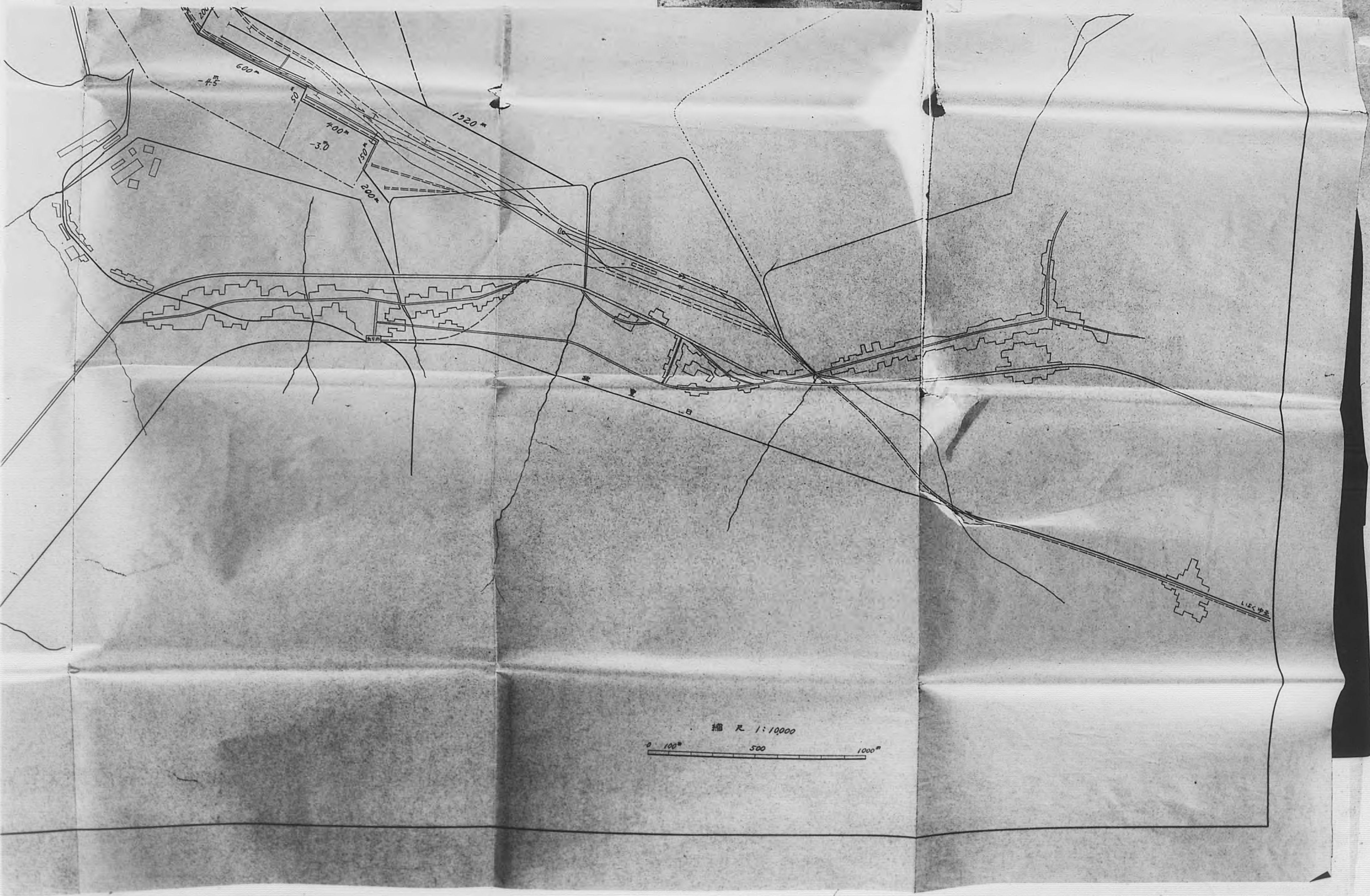




- 铁道施設
- | 護岸
- || 物揚場
- || 岸壁
- ∩ 防波堤

将来計画





600m

400m

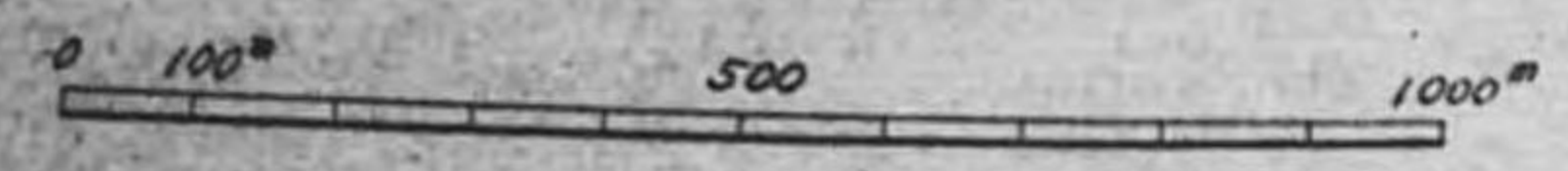
-3.0

150m

200m

1920m

縮尺 1:10000



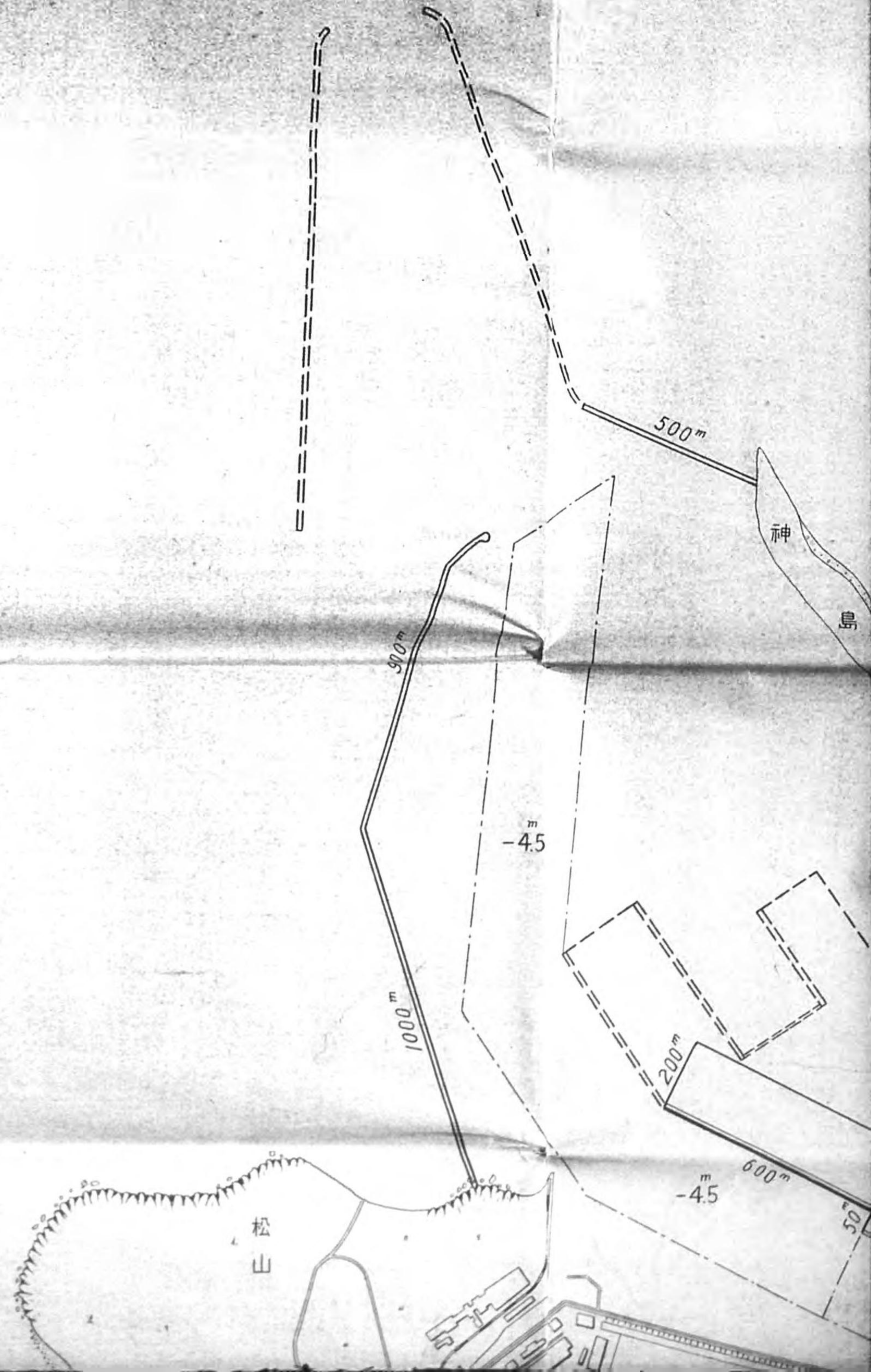
1500m



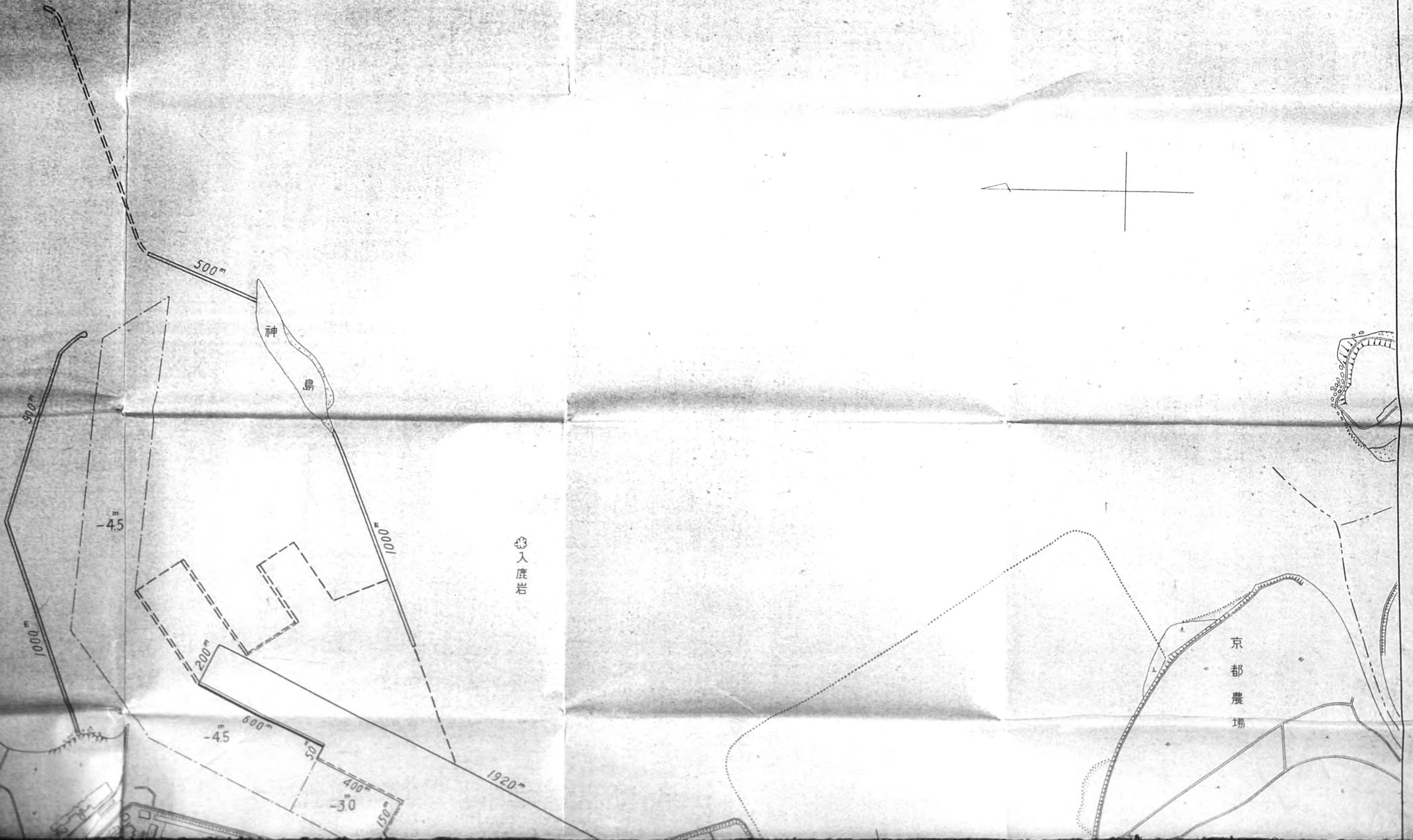
關下
部今司塞要
★ 13.6.8 ★
濟查檢

羽島

毛無島



圖面平近附及港田菊



600m
-4.5

松山

苅田新開

防波堤 将来計畫
 岸壁
 物揚場
 護岸

間島

町

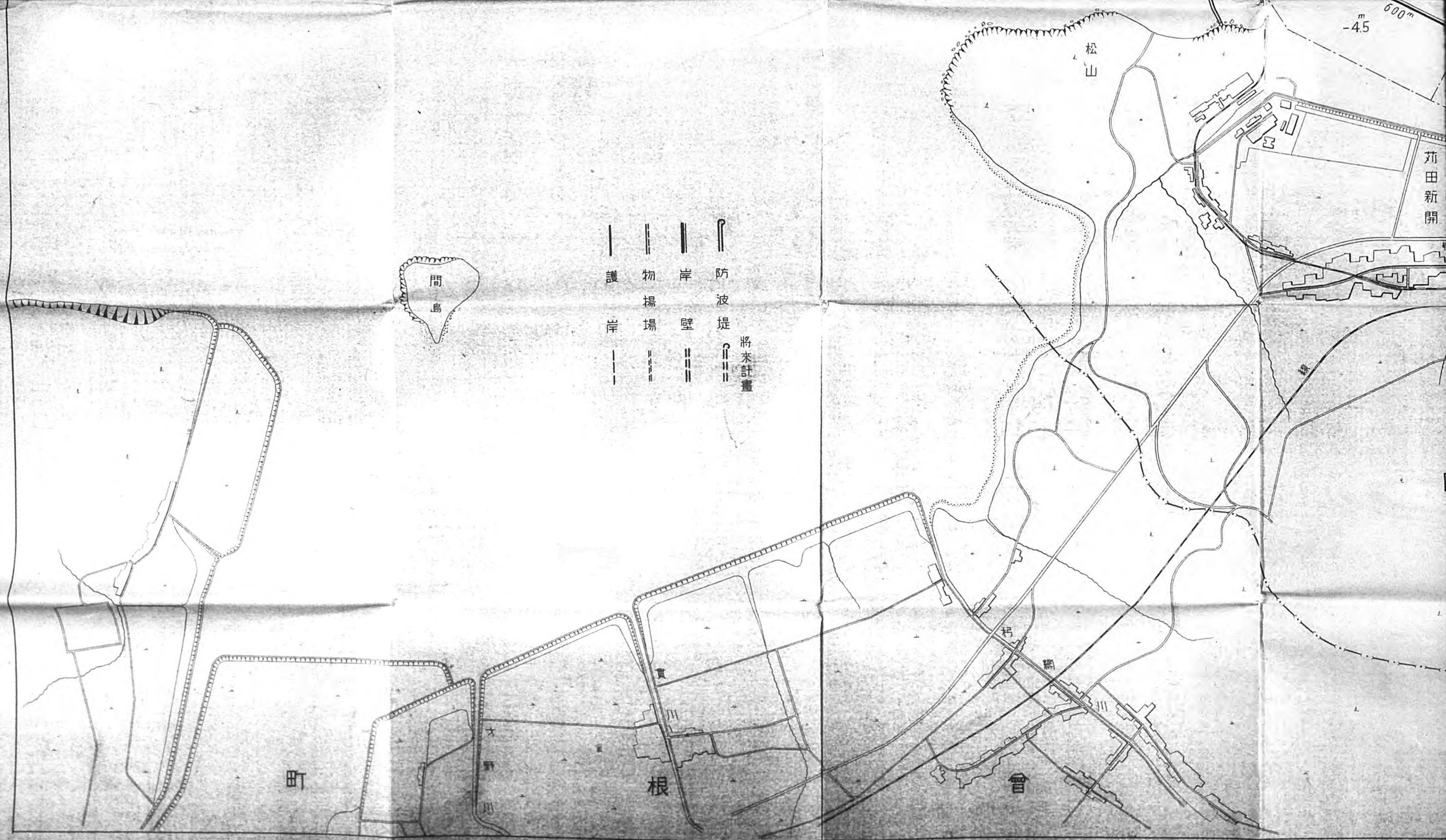
大野川

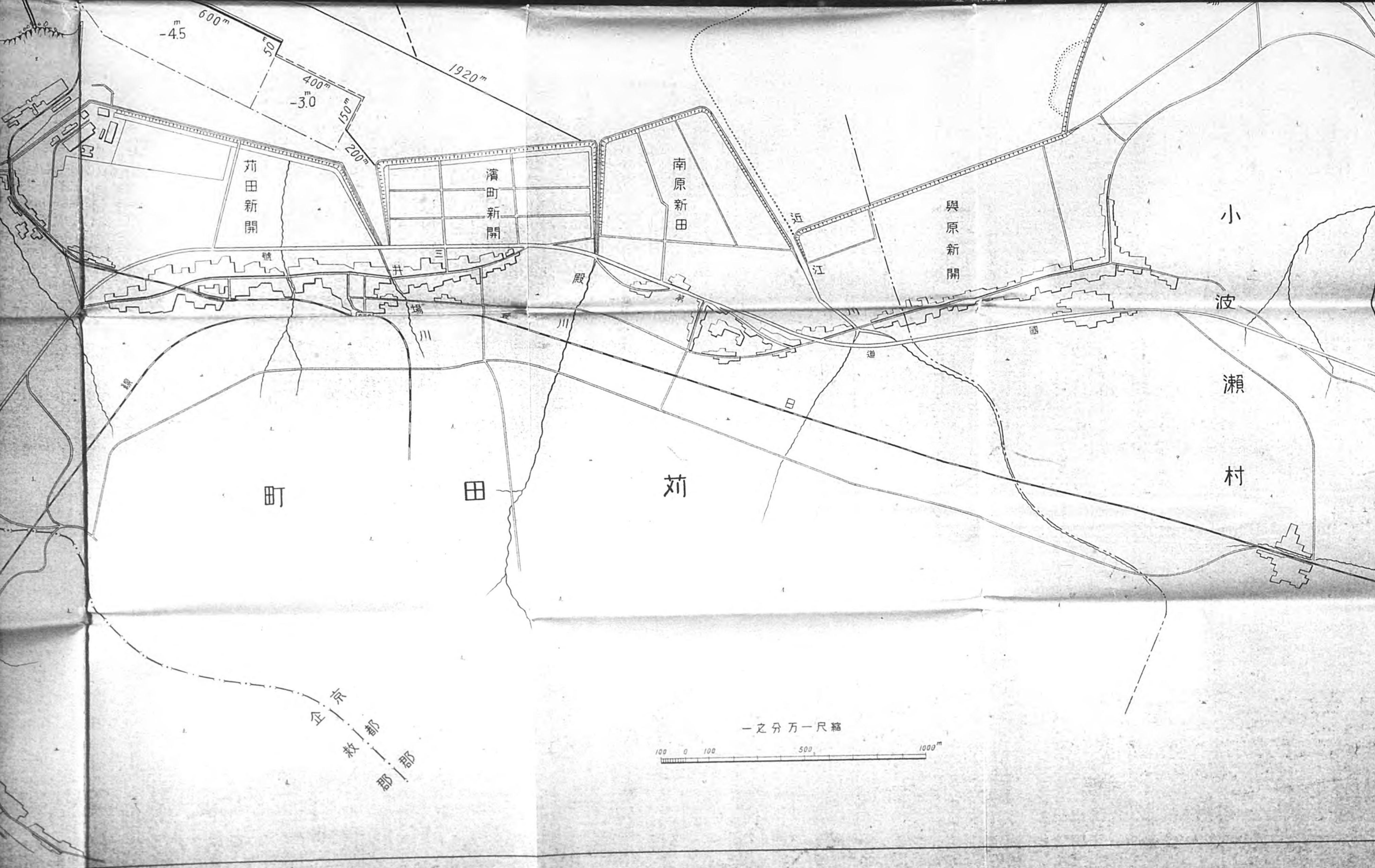
根

柄

網

會





600m
-4.5

400m
-3.0

1920m

新開
田

新開
濱田

新田
南原

新開
與原

小

波

瀨

村

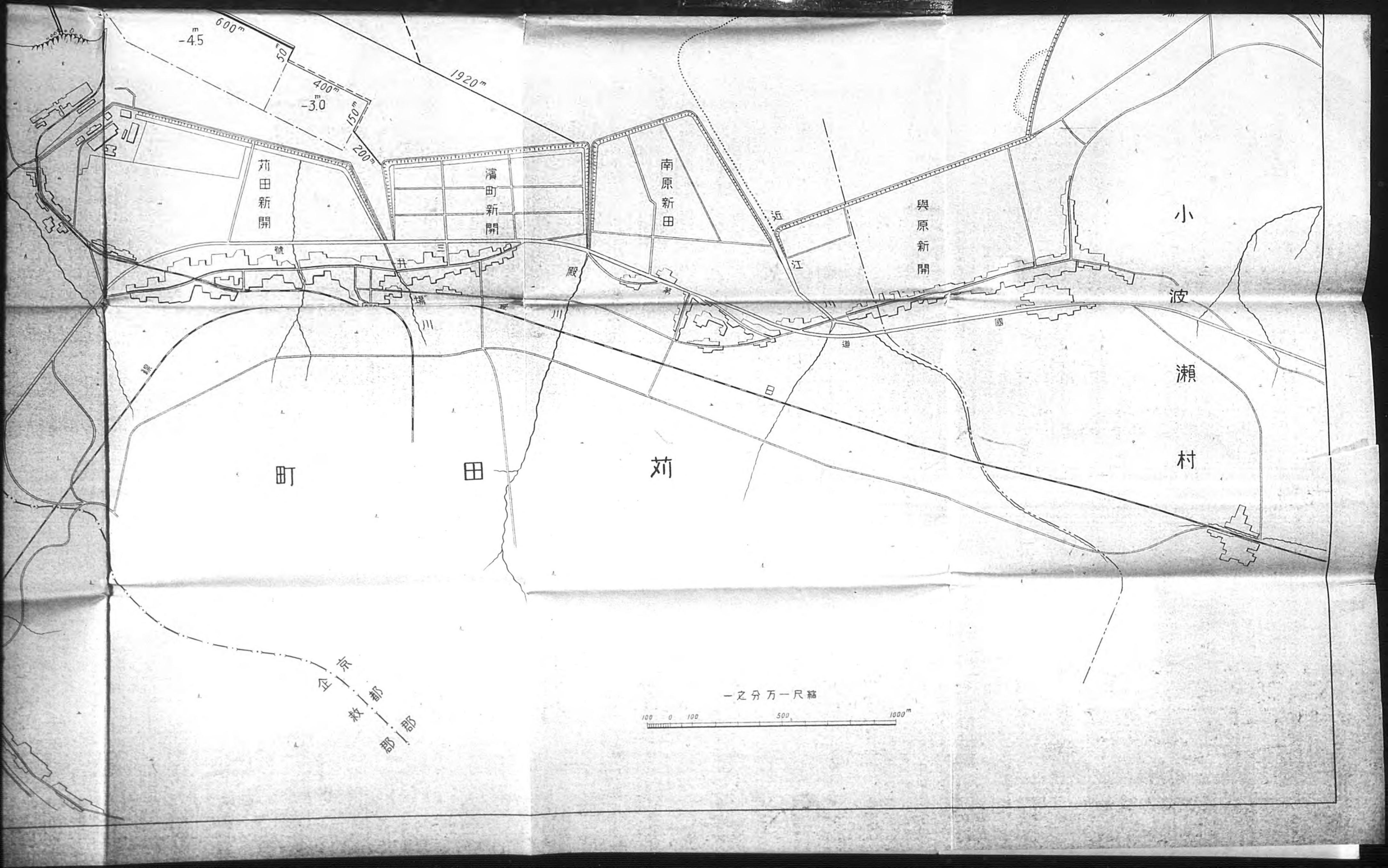
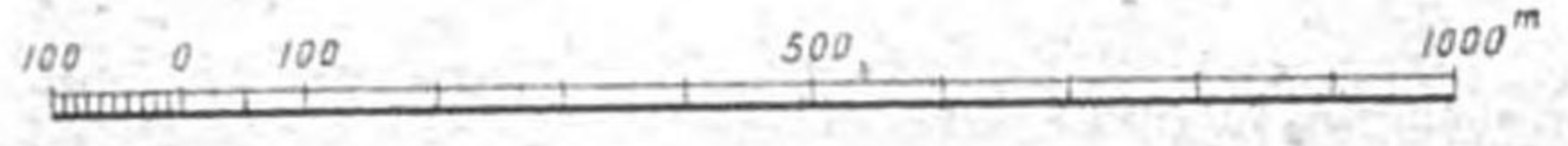
町

田

新

京
全
救
郡
郡

一之分万尺縮



極秘

一五

昭和十二年十二月

石炭需給五ヶ年計畫案

(石炭協議會成案)



目次

第一	石炭需給見込額	一頁
一	需給對照	二頁
二	内地用途別需要額	三頁
三	内地地方別生産額	四五頁
四	移入額	四五頁
五	輸入額	五六頁
六	特殊炭別需給對照	七八頁
(イ)	特殊炭別需要額	八九頁
(ロ)	特殊炭別供給額	八一頁
第二	石炭需給五ヶ年計畫遂行上實施スヘキ事項	九三頁
一	内地増産ニ關スル事項	九三頁
(イ)	事業資金ノ供給	九三頁

(四) 技術員ノ養成	14	四頁
(ハ) 労働者ノ充足	14	八頁
(ニ) 機械、主要材料及電力ノ供給	11	一頁
(ホ) 災害ノ防止	12	四頁
二 移輸入ニ關スル事項	20	四頁
(イ) 樺太及朝鮮ヨリノ移入	20	四頁
(ロ) 滿洲國ヨリノ輸入	21	五頁
(ハ) 中華民國及佛領印度支那ヨリノ輸入	21	六頁
三 配給ニ關スル事項	22	七頁
(イ) 陸上輸送設備ノ充實	22	七頁
(ロ) 海上輸送設備ノ充實	23	九頁
(ハ) 港灣施設ノ充實	25	九頁
(ニ) 輸送ノ共同處理	28	三頁
(ホ) 其ノ他配給ノ合理化	28	三頁

目次

第一	石炭需給見込額	一頁
一	需給對照	二頁
二	内地用途別需要額	三頁
三	内地地方別生産額	四五頁
四	移入額	四五頁
五	輸入額	五六頁
六	特殊炭別需給對照	七八頁
(1)	特殊炭別需要額	八九頁
(2)	特殊炭別供給額	八一頁
第二	石炭需給五ヶ年計畫遂行上實施スヘキ事項	一〇三頁
一	内地増産ニ關スル事項	一〇三頁
(1)	事業資金ノ供給	一〇三頁

四 炭價ニ關スル事項	29	三四頁
(イ) 生産費ノ低下	29	三四頁
(ロ) 炭種ノ單純化、規格統一	29	三四頁
(ハ) 需給ノ調整	30	三五頁
五 消費ニ關スル事項	30	三六頁
(イ) 適性使用ノ獎勵	30	三六頁
(ロ) 有效利用價值ノ增進	31	三六頁
(ハ) 消費ノ節約	31	三七頁
(附) 石炭需給五ヶ年計畫ニ伴フ經費概算(政府)	33	
技術員養成ニ要スル經費概算	33	
石炭輸送施設擴張費概算	35	
港灣改良費概算	37	
各港別積出豫想量	38	
石炭輸送増加ニ要スル車輛見込數	46	

樺太石炭需給五ヶ年計畫
朝鮮石炭需給五ヶ年計畫

石炭輸送ニ要スル汽船ノ見込噸數 86

石炭需給五ヶ年計畫

各種産業ノ急速ナル進展ニ伴ヒ其ノ熱源、動力源タル石炭ノ需要ハ噸ニ増加シ殊ニ鐵鋼増産計畫、化學工業ノ勃興、人造石油工業ノ實現等ニ依リ五ヶ年後ノ昭和十六年度ニハ内地ニ於テ約七千五百万噸ニ達スル見込ニシテ之カ供給ヲ確保スルト共ニ需給ノ調整ヲ圖リ炭價ノ公正ヲ期センカ爲ニハ多岐多様ニ亘ル諸問題ヲ解決スルノ要アリ仍テ茲ニ石炭需給五ヶ年計畫ヲ樹テ之カ實現ノ爲必要ナル諸問題ニ付檢討ヲ加ヘタリ

第一 石炭需給見込額
 一需給對照 (單位千噸)

項目	需			要			力能供給	過 不 足
	內地需要	移出	輸出	計	內地	移入		
(實績) 十一年	四六、二一〇	九〇〇	一一、一〇〇	四八、一二〇	四一、八〇三	一、七六〇	四四、四二〇	(-) 二、三三七
十二年	五〇、二六一	九七三	一一、〇〇〇	五二、二三四	四七、九七四	二、一四一	四四、一一〇	(+) 一、九九一
十三年	五三、九八五	一、〇〇五	一一、〇〇〇	五五、九九〇	五三、〇〇四	三、三〇五	六一、一五〇	(+) 六、四四九
十四年	六〇、三一三	一、〇三七	一一、〇〇〇	六二、三五〇	五八、〇七六	四、九八六	七、六九〇	(+) 八、四〇二
十五年	六五、八八〇	一、〇八八	一一、〇〇〇	六七、九六八	六四、一八〇	六、二九〇	六、五五〇	(+) 九、〇五二
十六年	七一、九五六	一、二四八	一一、〇〇〇	七四、二〇四	六九、五〇六	七、三二八	七、三五〇	(+) 九、九八〇

備考

(一) 過剩ハ豫想外需給變動ニ對處スル爲供給ノ余力ヲ見込ミタルモノナリ

(二) 十一年度ノ不足ニ對シテハ貯炭ヲ以テ之ヲ充シ得タリ

(三) 移出、移入ハ朝鮮及樺太ノ石炭需給五ヶ年計畫ニ於ケル移入額、移出額ヲ夫々計上セリ、而シテ該移出額中ニハ其ノ余力ヲ見込ミタリ

四 臺灣ニ於テハ自給自足ノ豫定ナリ

二 内地用途別需要額 (單位千噸)

用途別	十一年 (實績)	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年
製鐵業	五九四〇	七、一六〇	八、一三〇	一〇、四二〇	一、八四〇	一、四一四〇
化學工業	五三八〇	六、三三〇	七、一四〇	七、七五〇	八、三三〇	八、九一〇
內船燃料	四、四四〇	四、八六六	五、〇八〇	五、三一八	五、五三五	五、七六一

三内地地方別生産額（單位千匁）

地方別	十一年 (實績)	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年
九州	二六、六四九	二九、八七九	三二、六一一	三四、九六七	三八、一一二	四〇、五〇二
北海道	九、二八八	一、五八八	三、五九六	一五、九三八	一八、六八五	二一、三七二
常磐	二、八八一	三、二五六	三、四九二	三、七三二	三、八四七	四、〇〇九
山口	二、九〇六	三、一六〇	三、一七四	三、三三〇	三、四二〇	三、五〇〇
其ノ他	七九	九一	一〇一	一〇九	一一六	一二三
計	四一、八〇三	四七、九七四	五三、〇〇四	五八、〇七六	六四、一八〇	六九、五〇六

四移入額（單位千匁）

地方別	十一年 (實績)	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年
樺太	一、一〇〇	一、五三〇	二、三三五	三、六三五	四、七九二	五、六五七

計	臺灣	朝鮮
一、七六〇	一〇〇〇	五六〇
二、一四一	1	六一一
三、三〇五	1	九七〇
四、九八六	1	一、三五一
六、二九〇	1	一、四九八
七、三二八	1	一、六七一

備考 拓務省調査ニ依ル

五 輸 入 額 (單位千圓)

地 方 別	(實績)年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年
滿 洲 國	二、二八〇	二、〇〇〇	三、五五〇	四、八九〇	三、五五〇	四、〇五〇
中 華 民 國	一、〇二〇	一、〇〇〇	一、五〇〇	一、六〇〇	一、七五〇	二、〇〇〇
北 洋 太 平 洋	二四〇	一、一〇〇	二〇〇	二〇〇	三五〇	三〇〇
佛 領 印 度 支 那	八八〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
計	四、四二〇	四、一〇〇	六、一五〇	七、六九〇	六、五五〇	七、三五〇

(一) 滿洲國

對滿事務局ノ調査ニ依ル但シ十二年度ハ新情勢ニ依ル變化ヲ推定加味セリ

(二) 中華民國

北支ノ情勢安定セルモノトシテ既開發炭鑛ヨリノ輸入可能ノモノニツキ計上セルモ同方面石炭資源ノ開發ノ計畫ヲナシ輸入ノ増進ヲ圖リ需給ノ調整ヲ圖ルノ要アリ

(三) 北樺太

情勢ノ推移如何ニ依リテハ多少ノ變更アルヘシ
現在程度ニ輸入スルモノトシテ計上セリ

(四) 佛領印度支那

六特殊炭別需給對照 (單位千噸)

無煙炭	直接油化原料炭			炭用スクーコス瓦鐵製						項目	
				配殊持 炭合			炭料原				
				過不足	供給	需要	過不足	供給	需要		過不足
二、八八〇 二〇〇	二、八六〇	1	1	1	(+) 三、四三三	一、四六〇	一、一一七	(+) 三、九二三	九、五一六	五、五九三	十二年
三、〇二〇	三、〇二〇	1	1	1	(+) 五、六〇〇	一、八八〇	一、三二〇	(+) 四、四八七	〇、七八七	六、三〇〇	十三年
三、一七〇	三、一七〇	(+) 七、五三一	七、六三一	一〇〇	(+) 一〇〇	一、九〇〇	一、八〇〇	(+) 四、一二九	一、九五九	七、八三〇	十四年
三、四〇〇	三、四〇〇	(+) 七、七〇一	八、〇四一	三、三四〇	(+) 一、一五	二、三〇〇	二、一八五	(+) 三、七七六	一、二八七	九、〇九五	十五年
三、七四〇	三、七四〇	(+) 八、〇〇九	八、三九九	三九〇	(+) 一五	二、七〇〇	二、六八五	(+) 三、七六九	一、四、四六四	一〇、六九五	十六年

(1) 特殊炭別需要額 (單位千噸)

項目	製鐵瓦斯コ クス用炭		直接 油化 原料炭	無煙							
	原料炭	特殊 配合炭		製 鐵 業	窯 業	電 氣 業	瓦斯 コ クス 業	紡 織 業	化學 工業	食品 工業	官 業
十二年	五、五九三	一、二一七	1	七五	三三三	五六	二二七	一〇四	四四一	五二	六二
十三年	六、三〇〇	一、三二〇	1	九五	三五〇	五九	二三八	一〇九	四六三	五五	六五
十四年	七、八三〇	一、八〇〇	一〇〇	一〇三	三七〇	六二	二四七	一一四	四八五	五八	六八
十五年	九、〇九五	二、一八五	三四〇	一一一	四〇八	六五	三一七	一一九	五〇七	六一	七一
十六年	一〇、六九五	二、六八五	三九〇	一二〇	五〇六	六八	四三五	一一四	五二九	六四	七四

備考

特殊配合炭ハ製鐵用原料炭ニノミ混入スルモノトシ其ノ三分ノ一ヲ計上セリ

計	炭		
	其ノ他	煉炭	煖房
二、八六〇	六五	一、二一二	二三三
三、〇二九	六八	一、二七三	二四五
三、一七〇	七一	一、三三五	二五七
三、四〇〇	七四	一、三九八	二六九
三、七四〇	七七	一、四六二	二八一

(口) 特殊炭別供給額 (單位千噸)

項目	製鐵瓦斯用炭						直接油化原料炭 (適性炭)
	原料炭			特殊配合炭			
	計	九州	北海道	計	北支	北樺太	
十二年	九、五一六	五、八〇一	三、七一五	一、四六〇	一、八〇〇	一一〇	一
十三年	一〇、七八七	六、四〇〇	四、三八七	一、八八〇	一、二〇〇	一〇〇	一
十四年	一、九五九	六、八九七	五、〇六二	一、九〇〇	一、〇八〇	二〇〇	七、六三一
十五年	二、八七一	七、二〇四	五、六六七	二、三〇〇	一、四〇〇	二五〇	八、〇四一
十六年	一、四六四	八、一四二	六、三二二	二、七〇〇	一、七〇〇	三〇〇	八、三九九
九州	二、五五〇	五、八〇一	三、七一五	一、五五〇	一、一〇〇	一一〇	一
北樺太	五、八〇	六、四〇〇	四、三八七	五、八〇	一、〇〇〇	一〇〇	一
北支	六、二〇	六、八九七	五、〇六二	一、〇八〇	一、〇八〇	二〇〇	一
計	九、五一六	九、五一六	九、五一六	一、四六〇	一、四六〇	一、四六〇	一
九州	二、五五〇	五、八〇一	三、七一五	一、五五〇	一、一〇〇	一一〇	一
北樺太	五、八〇	六、四〇〇	四、三八七	五、八〇	一、〇〇〇	一〇〇	一
北支	六、二〇	六、八九七	五、〇六二	一、〇八〇	一、〇八〇	二〇〇	一
計	九、五一六	九、五一六	九、五一六	一、四六〇	一、四六〇	一、四六〇	一
九州	二、五五〇	五、八〇一	三、七一五	一、五五〇	一、一〇〇	一一〇	一
北樺太	五、八〇	六、四〇〇	四、三八七	五、八〇	一、〇〇〇	一〇〇	一
北支	六、二〇	六、八九七	五、〇六二	一、〇八〇	一、〇八〇	二〇〇	一
計	九、五一六	九、五一六	九、五一六	一、四六〇	一、四六〇	一、四六〇	一

無煙炭		内地生産	朝鮮	佛領印	其ノ他	計
		一、〇七〇	六〇〇	一、〇〇〇	二一〇	二、八八〇
		一、一二〇	七〇〇	一、〇〇〇	二〇〇	三、〇二〇
		一、二五〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二〇	三、一七〇
		一、一九〇	一、二〇〇	一、〇〇〇	一〇	三、四〇〇
		一、三二〇	一、三〇〇	一、〇〇〇	二二〇	三、七四〇

備考

(一) 特殊配合炭ハ高島、大瀬炭ノ約八〇%カ之ニ適スルモノトシテ計上セリ

(二) 直接油化原料炭(適性炭)ハ今日迄ノ實驗調査ヲ基礎トシタルモノナルモ今後ノ炭質調査ノ結果ニ依リテハ多少ノ變更アルヘシ

(三) 直接油化原料炭(適性炭)中ニハ「コークス」用原料炭ニモ

適
ス
ル
モ
ノ
ア
リ

一
二

第二 石炭需給五ヶ年計畫遂行上實施スヘキ事項

一 内地増産ニ關スル事項

(1) 事業資金ノ供給

増産ノ爲必要トスル固定資金及運轉資金ノ概算左ノ如シ

(單位千圓)

昭和十二年	十三年	十四年	十五年	十六年
1	1	1	1	1
設備擴張	設備擴張	設備擴張	設備擴張	設備擴張
設備新設	設備新設	設備新設	設備新設	設備新設
計	計	計	計	計
1	1	1	1	1
12,342	10,060	10,144	12,208	10,652
13				

備考

(一) 固定資金中設備擴張ニ要スルモノハ出炭一匁ニ付一〇圓、設備新設ニ要スルモノハ出炭一匁ニ付一五圓二〇錢ノ割合ヲ以テ計上セリ

(二) 運轉資金ハ出炭一匁ニ付八圓、年四回轉スルモノトシテ計上セリ

内地増産ハ大部分大手筋鑛業者ニ依リ實行セラルルモノト豫想セラレ而シテ事業資金ノ供給ニ付テハ大手筋鑛業者ハ大體自力ヲ以テ之ヲ賄ヒ得ヘシト雖モ中小石炭鑛業者中ニハ之カ調達ニ困難ヲ感スル者モアルヘキヲ以テ斯ル場合ニ對スル之カ供給ニ付テハ適切ナル措置ヲ講スルコト

(四) 技術員ノ養成

技術員ノ所要見込數及新規所要數左ノ如シ

昭和十一年（六月末日現在）

所要見込數名

新規所要數名

十二年	一〇、四〇〇	一、四四一
十三年	一、九六〇	一、五六〇
十四年	一、三六〇〇	一、六四〇
十五年	一、五四九八	一、八九八
十六年	一、七三二〇	一、八二二

而シテ新規ニ要スル技術員中採鑛關係者約六五%、機械關係者約一八%、電氣關係者約八%、其ノ他約九%ニシテ且上級者（大學、專門學校卒業者）約三〇%、下級者（中等學校卒業者）七〇%ノ見込ナルヲ以テ毎年ノ新規所要數ヲ約一、八〇〇名ト看做シ其ノ内譯ヲ示セハ左ノ如シ

右ノ中機械關係、電氣關係及其ノ他ノ技術員ニ付テハ現在施設及
 既存ノ計畫ニ依リ充員シ得ラルル見込ナルヲ以テ特ニ考慮ヲ要ス
 ルハ採鑛關係ノ技術員ナリ而シテ既存計畫ニ依ル採鑛關係技術員
 ノ充員見込數左ノ如シ

	上級者(名)	下級者(名)	計(名)
採鑛關係	三五一	八一九	一、一七〇
機械關係	九七	二二七	三二四
電氣關係	四三	一〇一	一四四
其ノ他	四九	一一三	一六二
計	五四〇	一、二六〇	一、八〇〇

昭和十二年	大學、專門 學校卒業者 數(名)	同上中充員 見込數(名) (卒業者數 ノ五〇%)	中等學校卒 業者數(名)	同上中充員 見込數(名) (卒業者數 ノ五〇%)
昭和十二年	一一一	六一	六八	三四

昭和十三年	一四五	七三	一五八	七九
十四年	一四九	七五	一二八	六四
十五年	一七五	八八	一二八	六四
十六年	一七五	八八	一七八	六四

備考

官公立學校ニ於ケル採鑛科卒業者ニ付テノミ調査シタルモノナリ

右ノ外商工省臨時養成所ノ卒業者ニシテ充員見込ノモノ昭和十四年以降毎年約四〇〇名（上級者及下級者ヲ含ム）アリ又炭鑛業者中ニハ現ニ技術員養成機關ヲ有スル者アリ夫々其ノ養成ニ努メツツアリト雖モ現在施設及既存計畫ニ依ル充員見込數ハ新規所要數ニ比シ猶足ラサルヲ以テ之カ補充ノ爲左記對策ヲ講スルコト

(一) 高等工業學校採鑛科増募ニ依リ上級技術員一五〇名ノ養成ヲ圖ル

コト

(二) 中等工業學校採礦科學科新設ニ依リ下級技術員三二〇名ノ養成ヲ

圖ルコト

(三) 中等工業學校採礦科ニ短期(一年)修業ノ二部ヲ設置シ下級技術

員四〇〇名ノ養成ヲ圖ルコト

(四) 炭鑛業者中現ニ技術員養成機關ヲ有スルモノニ付テハ其ノ充實並

ニ擴張ヲ爲サシムルト共ニ現ニ之ヲ有セサルモノニ付テハ之カ設

置ヲ勸興スルコト

(イ) 労働者ノ充足

労働者ノ所要見込數及新規所要數左ノ如シ

所要見込數(名)

新規所要數(名)

昭和十一年(六月末日現在)

一九八、三四六

十二年

二二八、七四三

三〇、三九七

十三年

二六〇、一〇三

三一、三六〇

昭和十四年

二九三、四八八

三三、三八五

十五年

三三〇、六五二

三七、一六四

十六年

三六八、七二五

三八、〇七三

而シテ新規ニ要スル労働者ノ充足ニ付テハ左記ノ措置ヲ講スルコト

(一) 新規ニ要スル前記労働者ヲ充足セシムル爲積極的ニ適切ナル措置ヲ講スルコトトシ不取敢左記要綱ニ依リ公益職業紹介機關ヲシテ紹介ノ斡旋ヲ爲サシムルコト

一 炭鑛所在地ノ道、府、縣ニ於テ求人ノ受付ヲ爲シ炭鑛側トノ労働條件竝ニ紹介方法等ニ關スル要綱ヲ協定シテ之ヲ募集地道、府、縣ニ通報スルコト

一 右通報ヲ受ケタル募集地道、府、縣ニ於テハ應募ノ可能性アル地方ノ調査ヲ爲シ該地方ニ對シテハ特ニ適切ナル方法ヲ講シ募集ノ実績ヲ收メシムルコト

一内地在住朝鮮人労働者ニシテ就勞状態思ハシカラザルモノニ付テハ強力紹介就勞セシムルコト

一職業紹介機關ニ於テハ所轄鑛山監督局ト緊密ナル連絡ヲ保持シテ紹介ノ目的達成ノ爲万全ヲ期スルコト

(二)労働者ノ充足ヲ容易ナラシムルト共ニ在籍鑛夫ノ移動ヲ防止スル爲左記要綱ニ依リ炭鑛側ヲシテ作業方法ノ合理化及労働條件ノ改善ヲ圖ラシムルコト

一坑内採炭ノ合理化實施ニ當リテハ災害防止ノ點ノミナラス労働者ノ健康保全ノ點ニ付テモ充分留意シ其ノ施設ヲ講スルコト

一稼働條件不利ナル箇所ニ就業スル労働者ノ賃金ニ付テハ特ニ適當ニ考慮スルコト

一労働者ノ雇傭及賃金支拂ノ方法ニ付テハ從來ノ納屋頭ノ如キ制度ヲ廢シ所謂純直轄制ヲ一層徹底セシムルコト

一坑内夫ニ付テハ賃金引上其ノ他有效適切ナル施設ヲ講スルコト

(二) 機械主要材料及電力ノ供給

(一) 機械ノ新規所要見込數左ノ如シ

昭和十一年(實數)

所要數

電動鑿岩機	一、二九六	二、三七一
壓氣	三、〇〇〇	五、四八八
截炭機	二二八	四一七
斜坑運搬機	一、六〇三	二、九三三
水平坑道及片 磬坑道運搬機	一、一四九	二、一〇一
切端運搬機	一、三〇七	二、三九一
排水唧筒	三、七二九	六、八二一
扇風機	一、七九五	三、二八四
携帶用安全電燈	九六、六三九	一七、六七八二

(二) 主要材料ノ新規所要見込數左ノ如シ

項目	單位	昭和十一年 (實數)	昭和十二年	同十三年	同十四年	同十五年	同十六年
木材	石	四二五二七五七	四八八二一六五	五三九二四九六	五九〇七〇八〇	六五二七九八二	七〇七二三五
坑木	、	三七一九四八三	四二六九九六六	四七一六三〇四	五一六六三六二	五七〇九四〇六	六一八五五〇〇
其他	、	五三三二七四	六一二一九九	六七六一九二	七四〇七一八	八一八五七六	八八六八三五
鐵鋼材	噸	九六四六九	一〇五〇〇七	一一五九八二	一二七〇四九	一四〇四〇五	一五三一一三
軌條	、	二四三七一	二七九七八	三〇九〇二	三三八五一	三七四〇九	四〇五二九
鐵鋼管	、	一四八一六	一七〇〇九	一八七八七	二〇五七九	二二七四三	二四六三九
支柱用 鐵鋼材	、	二八一七三	三三三四三	三五七二三	三九一三二	四三二四六	四六八五二
其他	、	二四一〇九	二七六七七	三〇五七〇	三三四八七	三七〇〇七	四〇〇九三
爆藥類	、	、	、	、	、	、	、
爆藥	、	六八三、三八九	七八四、四三五	八六六、二〇一	九四八、七九九	一〇、四八六、一八二	一、三六〇、六〇〇

雷管	個	導火線	米
	六〇五九三二四四六九五六一〇四四七六八三三三三八四一六四〇一六九三〇一〇六三〇一〇〇七六六五六五		一九一〇九六一六三一〇九三七八三九三四二三四九九三三六五四三二五七二九三三三二六一
			三、七七七九二九一

(三) 電力ノ所要見込量左ノ如シ (單位千キロワット時)
 昭和十一年 (實績) 一、二一九、二六四

十二年	一、四五三、八五〇
十三年	一、六五二、三〇一
十四年	一、八五八、五〇八
十五年	二、一〇一、一九四
十六年	二、三四〇、一〇〇

以上機械、主要材料、及電力ノ供給ニ付テハ豫メ供給者側ト充
 分ノ連絡ヲ保持シ其ノ確保ヲ圖ルコト而シテ鐵鋼材等内地ニ於
 テ供給困難ノ場合ニ在リテハ海外ヨリノ輸入ニ俟タサルヘカラ
 サルヲ以テ輸入爲替ノ許可ヲ圓滑ナラシムル等ノ措置ヲ講シ其

ノ供給ニ付支障ナカラシムルコト

(ホ) 災害ノ防止

増産計畫實施ノ進捗スルニ伴ヒ稼行ニ無理ヲ生シ爲ニ災害ヲ誘發スルカ如キ場合モ多々アルヲ以テ之カ防止ノ爲鑛山監督局ニ於ケル機能ヲ強化シ適正ナル監督指導ヲ爲スト共ニ一面豫防施設ノ充實ヲ圖ルノ要アリ而シテ之カ爲ニハ炭鑛地ニ監督官ヲ駐在セシメ監督上遺憾ナキヲ期スルノ外炭鑛ニ於ケル機械裝置ノ改良、爆發ノ豫防等ニ關シテハ時ニ其ノ研究機關ヲ擴充シ其ノ試験研究ヲ全カラシムルト共ニ關係各方面ト連絡ヲ保チ安全運動ノ徹底ヲ圖ル等適切ナル對策ヲ講スルコト

ニ移輸入ニ關スル事項

(イ) 樺太及朝鮮ヨリノ移入

樺太及朝鮮ヨリノ移入數量左ノ如シ (單位 千噸)

樺太

昭和十二年 一、五三〇

十三年 二、三三五

十四年 三、六三五

十五年 四、七九二

十六年 五、六五七

朝鮮

六一一

九七〇

一、三五一

一、四九八

一、六七一

右ハ樺太及朝鮮ノ移出能力ニシテ樺太及朝鮮ニ於ケル石炭需給
五ヶ年計畫ノ實施ヲ前提トスルヲ以テ之カ爲必要ナル資金、技
術員其ノ他人的竝ニ物的資材ニシテ内地ヨリ供給ヲ要スルモノ
ニ付テハ本計畫ノ遂行上實施スヘキ事項ト併セ考慮スルコト

(四) 滿洲國ヨリノ輸入

滿洲國ヨリノ輸入數量左ノ如シ (單位千噸)

昭和十二年 二、〇〇〇

十三年 三、五五〇

昭和十四年

四八九〇

十五年

三五五〇

十六年

四〇五〇

右輸入ニ付テモ樺大及朝鮮ヨリノ移入ノ場合ト同様ノ措置ヲ講

スルコト

(イ) 中華民國及佛領印度支那ヨリノ輸入

中華民國及佛領印度支那ヨリノ輸入數量左ノ如シ

(單位千噸)

中華民國

佛領印度支那

昭和十二年

一、〇〇〇

一、〇〇〇

十三年

一、五〇〇

一、〇〇〇

十四年

一、六〇〇

一、〇〇〇

十五年

一、七五〇

一、〇〇〇

十六年

二、〇〇〇

一、〇〇〇

右輸入ニ付テハ輸入爲替ノ許可ヲ圓滑ナラシムル等ノ措置ヲ講
スルコト

三 配給ニ關スル事項

(1) 陸上輸送設備ノ充實

陸上輸送ヲ要スル見込數量左ノ如シ (單位千噸)

九州 北海道 常磐

昭和十二年	二〇、九〇〇	一〇、六二三	三、〇〇〇
十三年	二、九四〇	一、二四九一	三、二一六
十四年	二、四四七七	一、四三六六	三、四八二
十五年	二、六五七七	一、六五五八	三、七三三
十六年	二、八四五七	一、八九六六	三、九五二

右輸送數量ヲ處理シ其ノ圓滑ヲ圖ルカ爲ニハ荷役設備及荷役法
ノ改善ニ依リ各施設ノ能力ヲ充分發揮セシムルト共ニ左記措置

ヲ講スルコト

一前記輸送數量ニ對應スル機關車、石炭貨車及一般貨物積載用無蓋車ノ増備ヲ圖ルコト

一飯塚、小竹間ノ複線工事ヲ促進スルコト

一東室蘭、追分間ノ複線工事ヲ促進スルコト

一松浦線ノ改善ヲ促進スルコト

一若松、直方、岩見澤其ノ他ノ關係驛ノ設備ノ改善ヲ圖ルコト

(ロ)海上輸送設備ノ充實

海上輸送ヲ要スル見込數量左ノ如シ(單位千噸)

汽船積

	九州	北海道	山口	移輸出炭	移輸入炭
昭和十二年	一〇、三〇七	六、七二〇	六四二	一、九七三	六、二五一
十三年	一一、七九一	八、三五〇	六四九	二、〇〇五	九、四五五
十四年	一二、四一六	九、八六二	七六四	二、〇三七	一二、六七六

昭和十五年	一三五八一	一一、〇八九	八一五	二、〇八八	一、二八四〇
十六年	一四六八八	一二、七五七	八三二	二、二四八	一、四六七八

帆船積 (補助帆船積ヲ含ム)

九州 山口

昭和十二年	八、八九一	二、〇九六
十三年	九、四五四	二、一一七
十四年	一〇、四五九	二、三六六
十五年	一一、〇〇三	二、四〇五
十六年	一一、一一三	二、四六八

右輸送數量ニ付テハ現有船舶及將來増加ノ見込アル船舶等ヲ考
 慮スレハ之ヲ處理シ得ル豫想ナルモ今後ノ情勢ニ應シ適船ノ増
 加ヲ圖ルコトトシ尙輸送ノ圓滑ヲ圖ルカ爲ニハ荷役設備及荷役
 法ノ改善ニ依リ荷役所要時間ノ短縮ヲ圖ルコト

(ハ) 港灣施設ノ充實

各積出港ニ於ケル積出見込數量左ノ如シ（單位千噸）

九州

年	積出港	昭和十二年	十三年	十四年	十五年	十六年
若松	戸畑	一三二九〇	一三七八〇	一四三七五	一五〇〇〇	一五〇〇〇
門司	小倉	三五〇	八八〇	四一二	一〇二五	一九四二
博多		一五八二	一七六〇	一九一三	二〇四六	二〇五八
住ノ江	唐津	八八三	九八四	一〇六八	一四四三	一五〇〇
三池		一〇五七	一三八二	一五三二	一六三三	一七四二
高島		四八一	五七一	六一二	六一二	六一二
白ノ浦		五三六	六一四	六六〇	七二七	七六六
相ノ浦		三七六	四七〇	四八〇	四八〇	四八〇
崎戸		八三三	九三三	一〇〇七	一〇四三	一〇八八
松島	大島	一三九	一七四	二三一	二九一	三一

(四) 常 磐

小名濱港ノ施設充實ニ伴ヒ之ヲ利用シテ積出スモノアルヘシ
右積出數量ヲ處理シ輸送ノ圓滑ヲ圖ルカ爲ニハ左記措置ヲ講スルコ

ト
一 筑豊炭ノ若松港積出量ハ洞海湾ノ一般利用及關門海峡和船通過數ノ

抑制等ヲ考慮シ差當リ最大一五、〇〇〇千噸程度ニ止ムルヲ適當ナリ

ト認メラルルヲ以テ之ニ對應スル 施設ノ充實ヲ行ヒ之レ

以上ノ數量ニ對シテハ瀬戸内海沿岸適當ノ場所ニ三、〇〇〇千噸以

上ノ積出能力アル港ヲ修築スルコトトシ其ノ間ノ對策トシテハ門

司、小倉等ノ既存施設ヲ使用スルコト

洞海湾整理ノ爲行ハルヘキ若松港ノ修築ニ伴ヒ戸畑側岸壁荷役ノ

能力減少スルヲ以テ之ニ對シテハ別途適當ノ方策ヲ考究スルコト

一 白ノ浦港ニ付テハ松浦線ノ改善ニ關聯シ積込施設ノ改善ヲ圖ルコ

ト

(二) 北海道

年度	積出港	小樽	室蘭	留萌	釧路
昭和十二年	二七一〇	三六一〇	四五〇	八二〇	
十三年	三三九〇	四三一〇	五四〇	一〇〇〇	
十四年	四〇一五	四九四五	六二七	一〇八三	
十五年	四四三八	五四〇六	七三四	一三八四	
十六年	五〇三三	六〇四〇	八六五	一六一〇	

(三) 山口

年度	積出港	宇部
昭和十二年	二七三九	二七三九
十三年	二七六六	二七六六
十四年	三一三〇	三一三〇
十五年	三二二〇	三二二〇

一 唐津、相ノ浦、宇ノ島各港ニ付テハ港灣施設ノ改善ヲ圖ルコト

二 小名濱港ニ付テハ輸送線ノ新設ヲ促進スルト共ニ積込施設ノ擴充

ヲ圖ルコト

一 室蘭、小樽、釧路各港ノ荷役能力ハ昭和十六年度豫想量ニ對シ不

足ナルヲ以テ現在施設ノ擴充ヲ圖ルト共ニ擴張計畫ヲ促進スルコ

ト

(イ) 輸送ノ共同處理

石炭ノ輸送ニ關シテハ荷主側及輸送者側ニ於テ夫々其ノ共同機關ノ充實ヲ圖ルト共ニ共同機關相互ノ間ニ於テハ密接ナル連絡ヲ保持シ以テ配給ノ圓滑ヲ圖リ輸送能率ノ向上ヲ期スルコト

(ロ) 其ノ他配給ノ合理化

石炭ノ輸送ハ季節ニ依リ繁閑ノ度甚シク爲ニ需要期ニ於テハ往々配給ノ圓滑ヲ缺ク場合アルヲ以テ石炭鑛業者、輸送者、消費地ノ問屋乃至ハ消費者相互間ニ於テ充分ノ連絡ヲ保チ可及的ニ輸送ノ

平均化ヲ圖ル等配給ノ合理化ノ爲適切ナル措置ヲ講スルコト
 四 炭價ニ關スル事項

(イ) 生産費ノ低下

炭價ヲ低廉ナラシムルコトハ一般産業發展上ノ要件ナリ而シテ
 之カ爲ニハ先ツ生産組織ノ合理化、技術ノ改善、配給ノ合理化
 等ニ依リ生産費低下ノ方途ヲ講スルノ要アルハ勿論ナリト雖モ
 就中生産組織ノ合理化ニ當リテハ近接スル炭鑛相互間ニ於ケル
 發電設備、排水運搬施設ノ共同化乃至ハ堅坑ノ合併等適切ナル
 措置ヲ講セシムルコト

(ロ) 炭種ノ單純化、規格統一

用途、品質ニ應シ炭種ヲ單純化シ其ノ規格ヲ統一スルトキハ貯
 炭及積込等ノ設備ノ節約トナルノミナラス荷役、輸送、販賣ヲ
 合理化スル結果トモナリ配給ニ要スル費用ヲ低下セシムルヲ以
 テ新ニ設置セラレタル石炭生産能力調査委員會ニ於ケル炭質ノ

一唐津、相ノ浦、宇ノ島各港ニ付テハ港灣施設ノ改善ヲ圖ルコト
二小名濱港ニ付テハ輸送線ノ新設ヲ促進スルト共ニ積込施設ノ擴充
ヲ圖ルコト

一室蘭、小樽、釧路各港ノ荷役能力ハ昭和十六年度豫想量ニ對シ不
足ナルヲ以テ現在施設ノ擴充ヲ圖ルト共ニ擴張計畫ヲ促進スルコ
ト

(五) 輸送ノ共同處理

石炭ノ輸送ニ關シテハ荷主側及輸送者側ニ於テ夫々其ノ共同機關
ノ充實ヲ圖ルト共ニ共同機關相互ノ間ニ於テハ密接ナル連絡ヲ保
持シ以テ配給ノ圓滑ヲ圖リ輸送能率ノ向上ヲ期スルコト

(六) 其ノ他配給ノ合理化

石炭ノ輸送ハ季節ニ依リ繁閑ノ度甚シク爲ニ需要期ニ於テハ往々
配給ノ圓滑ヲ缺ク場合アルヲ以テ石炭鑛業者、輸送者、消費地ノ
問屋乃至ハ消費者相互間ニ於テ充分ノ連絡ヲ保チ可及的ニ輸送ノ

調査ト相俟テ速ニ炭種ノ單純化、規格統一ノ方途ヲ講スルコト

(ハ) 需給ノ調整

將來益々増加セントスル石炭ノ需要ニ對シ其ノ量及質ニ應シ之
カ供給ヲ確保シ以テ其ノ需給ノ調整ヲ圖ルト共ニ炭價ヲ適正ニ
決定シ其ノ安定ヲ期センカ爲生産、移輸出及配給ノ統制ヲ圖
ルコト而シテ北支方面ニ於ケル石炭資源ノ開發ニ付テハ本邦ニ
於ケル需給ノ調整上重大關聯ヲ有スルヲ以テ右ノ諸點ヲ考慮シ
テ之カ開發計畫ヲ樹テルコト

五消費ニ關スル事項

(イ) 適性使用ノ獎勵

石炭ノ使用ニ當リ用途ニ應シ最モ適合シタル性質ノモノヲ選擇使用スルハ其ノ効率ヲ高ムルノミナラス無駄ヲ排除スル所以ナルヲ以テ之カ獎勵ヲ爲スルノ要アリ仍テ新ニ設置セラレタル石炭生産能力調査委員會ニ於ケル炭質ノ調査ト相俟テ石炭ノ適性ノ調査ヲ爲シ用途ニ應シ適性炭ヲ使用セシムル爲適切ナル方途ヲ講スルコト

(ロ) 有效利用價值ノ増進

石炭ノ成分ヲ最モ有效ニ利用シ無駄ナカラシムルハ石炭ノ消費ヲ合理化スル所以ナリ例之煖房用、家庭用等ニ在リテハ之ヲ乾餾シ「コーライト」トシテ使用スルカ如キハ其ノ利用價值ヲ増進スルノミナラス乾餾ノ際生シタル「タール」ハ液體燃料ノ原料ニ供シ得ルヲ以テ經濟的ニ利スル所大ナリ仍テ斯ル問題ニ付

廣ク調査スルト共ニ之カ實現ヲ圖ルコト

(ハ)消費ノ節約

石炭ノ消費ニ付テハ(イ)及(ロ)ニ述ヘタル事項ノ外焚燒方法ノ改良等合理化スヘキ事項尠カラス而シテ石炭消費ノ現状ヲ觀ルニ消費者ノ無關心、直接操作ニ從事スル者ノ技能ノ低劣乃至ハ操作上ノ不注意ニ因ル石炭ノ浪費ハ蓋シ尠カラサルモノアルヲ以テ消費者竝ニ直接操作ニ從事スル者ヲシテ自發的ニ斯ル浪費ノ節約ヲ排除セシメ以テ其ノ浪費ノ節約ヲ圖ルノ要アリ而シテ之カ爲ニハ官廳ニ於テ率先シテ之ヲ實行スルト共ニ民間消費者ニ對シ之カ實行ヲ促スコトトシ關係團體ヲシテ其ノ趣旨ノ徹底ヲ圖ラシムルコト

(終)

石炭需給五ヶ年計畫ニ伴フ經費概算（政府）

一、技術員養成ニ要スル經費概算 二、四二七五〇五 圓

二、石炭積出設備擴張費概算 七三、二五二、一八〇

三、港灣改良費概算 一七三〇〇〇〇〇

總計 九二、九七九、六八五

石炭需給五ヶ年計畫ニ伴フ技術員

養成ニ要スル經費概算

文 部 省

三九

一 高等工業學校生徒増募ニ要スル經費

區 分	昭和十三年度	昭和十四年度	昭和十五年度	昭和十六年度	計
臨時費	四一九七七五 <small>圓</small>	三七二、九八〇 <small>圓</small>	↓	↓	七九二、七五五 <small>圓</small>
經常費	一〇九、〇九〇	一四一、一〇〇	一六九、〇六〇	一六九、〇六〇	五八八、三一〇
計	五二八、八六五	五一四、〇八〇	一六九、〇六〇	一六九、〇六〇	一、四〇二、七〇五